
ダブルハート～箱庭世界とコイントス～

生温みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダブルハート〜箱庭世界とコイントス〜

【Nコード】

N3931T

【作者名】

生温みかん

【あらすじ】

『深夜0時、この世界は姿を変える。血も涙も無い、弱肉強食の“裏側”の世界にね』
とある時代、とある世界、とある国。人々は太陽の下で今日も思いの毎日を過ごす。だがそれは世界の“表”の顔でしかなかった。平和とは無縁の世界の“裏”。常識はずれの異能者たちが蔓延る、強さがすべての世界。相反する世界に生きる者たちが出会い、運命は交錯する。その行く末に見えるのは、希望か絶望か……。

1、少年アリス（前書き）

舞台となる世界は現実世界とよく似たものですが、実際の人物・団体等とは関係ありません。

拙い文章ではありますが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

1、少年アリス

音もない、人気もない、光もない。あらゆる“生”の存在を感じさせない、暗がりの路地。時間帯が真夜中のせいでもあるが、陰湿な空間がただひっそりとそこにあつた。

一見、秩序を保っているように見える　　そんな無法地帯。

「はっ、はあっ、は……っ、」

荒く乱れた息遣い。伝う冷や汗、青ざめた表情。フードの付いたグレーのパーカーに、黒いジャージをはいた男。行く先々、足元に散らばる空き缶、段ボール、『雛菊通り』の文字がうつすら書かれた小さいポロポロの立て札。男が起こした風圧に身を転がす。辺り一帯のあらゆるものに蹴つまずきながら、逃げるようにして走る。

否、男は逃げていたのだ。自分を追う、絶対的な存在から。もうどれくらい走つただろうか。細い、曲がりくねつた路地をひたすら駆け抜けた。それは行き先を求めたものではなく、ただあるものから逃げだしたいだけ。

呼吸を整えようと足を止め、後ろを振り返つた。陰の中、何も感じない。

ようやく逃げ切つた　　わけではなかった。言い知れぬ、鋭い衝撃。安堵する間もなく、腹部にじわりと染み込む感覚。赤と、痛み。細い銀色の一筋が、音もなく男の腹を貫いたのだ。

声を上げることも、動くことも出来なかつた。まるで金縛りにでも遭つたかのように。すでに容量オーバーな脳内は思考回路を上手く繋げられていない。男の視線の先、捉えて外さないもの腹部の中心を突き抜けた、赤を纏つた刃だけが瞳に映っていた。

『ぴかぴかの』という修飾語はあながち間違っておらず、授業にクラスメイトに部活に、活気溢れる学校に入学した篝は確かに輝きを感じていた。

色々と不安も大きかったが、友達も出来て女子ともそれなりに仲良く出来ている。謳歌するべき青春が自分にもあると信じているのだ。

「……倉科、気持ち悪い」

「……ほあ？ んだよいきなり失礼な」

「斜め45°。上を見上げてにやにやとまるで変な妄想をしているかのように笑う倉科篝君が気持ち悪い。伝わったかしら」

「……ご丁寧にどーも、女尊男卑の六条緋菜さん」

言いたいことはよくわかった。だが何よりも篝がよくわかったのは、この女が自分を馬鹿にしているという事実。今に始まったことではないのだが。ささやかな皮肉もまるでノーダメージ。

五月に入って、例によって席替えがあった。そこで偶然篝の隣になったのがこの女、六条緋菜。やや大人びたというか取っ付きにくい性格で、篝以外の男子とはほとんど会話していない。

と言うのも、そんな性格を出すのは男の前だけなのだ。相手が女子なら誰とでも優しく接する、それが篝の中で形成された『六条緋菜』の印象だ。

「……お前さ、もしかして実は男でしたとか言うオチ？」

「本気で言ってるんだとしたらあんた、相当な天然よね。それともただの馬鹿？」

篝の方を振り向こうともせず、鞆と机の中身のトレードに勤しむ緋菜。纏まった艶のある黒髪が時折揺れる。

六条緋菜男性説は一蹴されたわけだが、あんな風に男子をけなし

女子に囲まれて過ごす彼女なのだ。疑いたくなる気持ちぐらい察して欲しいのが篝の本音でもあったり。彼女は決して性格も暗いわけではなく、また結構美人の類に入るのは間違いないだろう。背中の中心まで伸びたストレートの黒髪。スカートからすらっと細く白い脚が覗く。喋らなければ少し気は強そうだが清纯派キャラも定着出来たかもしれない。

「……で、何してるの？」

「何……って、何だよ」

「や、もう放課後なんだけど」

「……あれー？」

ついにつこりと首を傾げる篝に、緋菜は「やっぱり馬鹿なのね。了解」と切り捨てた。鞆を手にとると、別れの挨拶一つなしに教室を後にした。先程の動作は次の準備の準備かと思いきや、どうやら帰る支度の間違いだったらしい。

気づけば、教室はもう人も疎ら。馬鹿馬鹿しいんだか気恥ずかしいんだか、そそくさと支度をして篝も教室を出た。

篝は高校一年生にして一人暮らしをしていた。両親は海外で仕事をしている。もうどれだけ前かもわからない程前から。顔もよく思い出せない、全く家に帰ってこないのだから。

前向きに考えるなら、料理を含め家事は主婦顔負けのものになったし、それら全てをそつ無くこなしながら普通に学校にも通えている。ご近所付き合いだって悪くない。この自立っぷりと生活力ならば同い年には負けない自信が篝にはあった。

学校を出て右に曲がり、左に曲がり、また右へ曲がって直進。徒歩十五分程度で帰れる距離に簀の自宅アパートはひっそりと立っている。

首に提げられる程度の長さの紐がついた、自宅の鍵。無用心にもぶらぶらと持った右手で揺らしながら帰路につく。ゆっくりとした足取りは、少し怠そうにも見える。それもそのはず、彼の頭の中は憂鬱で一杯なのだから。

簀はここ最近、妙な夢を見ていた。深い深い水の中にいる自分。水面は遙か頭上にあり、差し込む光はとても少ない。左右はどこまでも同じ景色、ただ深い青が広がるだけ。足元は暗くよく見えない。水中のはずが夢だからか、息苦しさだとかは全く無くて、まるで地上と変わらない。

この夢の中で最も異質なのは、自分の真正面にある鏡だった。縁は白く象られ、大きく全身を映せるサイズのそれは、確かに鏡だった。しかし鏡は、真正面に自分がいるにも関わらず何も映さないのだ。ただその鏡の前に立っているだけの自分。そんな情景を、しばしば夢で見るのだ。

「……なんだかなあ」

思わず漏れる呟き。何せ何もかもが不明瞭なのだ。生憎彼は夢占いだとかを信じるほうではなく、どこるか非科学的なものを快くは思っていなかった。何故かは簀自身よくわかっていなかったが、そういう人間は少なくない。

スローペースな歩みが続けていたわけだが、ようやく自宅アパートが見えて来たらしい。今日の晩御飯は何にしよう、なんて男子高校生らしからぬことを考えていた簀だが、自宅を目前にして、右手に掛かっていたはずの微量の重さが、ふっと霧散するように消えた。

『ぱくつ』という効果音が、多分何よりもしっくりくるのだろう。一瞬だった。振り子の如く揺れる獲物を、後ろから狙いを定めて黒猫が飛び掛かり、見事略奪成功。簡単に言えばそういうことだ。

「……えー、と。猫さん猫さん、そりゃ食べ物じゃありませんが」

篝はまだ事態を半分程度しか飲み込めていなかった。理由はわからないが、黒猫が自分の手元にあった鍵を奪った。それだけは理解出来たようだが。

どういうわけか、悪い予感がしていた。駄目元で話し掛けてみても、案の定黒猫殿は「にゃあ」と一言鳴いたり鳴かなかつたりするだけ。

そして、予感は何れなく的中。黒猫は鍵を口にくわえたまま、すぐそばの細い路地へと足早に走り去っていく。

「あ、ちょ……ッとマジか。マジで行くのかよおお……ッ！」

少しだけ、ほんの少しだけだが、鍵を置いていってくれたりしないかと考えてはいたのだ。あの鍵は錆びてこそいないが新しくもない、猫が欲しがるものとは思えなかったのだ。

しかしあくまで篝の解釈。猫に特別詳しいわけでもない。それよりも、見失ってしまう前に追いかければ、残念ながら、何故かあの鍵のスペアは鍵のかかった部屋の中だ。

まだ昼間だというのに、どことなく異質なものを感じさせる、そんな路地裏の入口。中に入れば、まるで別世界に繋がっているようなほど。この感覚は多分よく見るあの、夢に似ている。黒猫は少し先で、こちらを見ながら誘うように尻尾をゆらゆら揺らす。

見えない何かに怯えるのは、人間というものの性なのか。言い知れぬ恐怖をやや抱きながらも、篝は路地の奥へと駆け出した。黒猫

も動く、さらに奥へ。不思議な世界へ迷い込んだかのような少年を、彼の駆けたあと、物寂しい路地裏は静かに彼を見送った。空き缶に段ボール、そして『雛菊通り』の立て札が、再び風の中を転がった。

2、反転、目覚め

右折、左折、左折、右折。直進、左折、右折、左折。

数多の分岐点を右へ左へ通過する。つかず離れず、一定の距離を保ったまま黒猫は先へ先へと進んで行く。それを小走りで追いかける篤。肉体的疲労こそ少ないものの、もうすでに数十分はこの追いかけてつづいている。

「……ッ、あれ……？」

また同じように、路地を右に曲がった。そこでようやく足を止め、呼吸を整える。出て来たのは少し開けた場所。だが、そこにあの黒猫の姿はどこにもなかったのだ。よくよく見れば、鍵だけが路地の途中に置き去りにされていた。

「……何だったんだろ」

最初は遊んでほしくて鍵を盗ったのだと考えていた。そして今までの追いかけてつづきに至る。飽きて帰ったのだと思えば合点もいく。自分勝手にこちらのことを何も考えていないのは、相手が猫なのだから仕方ないでしょう。

ひとまず、寂しく置き去りにされた鍵を拾った。紐から鍵まで、異常はない。一瞬、もしやこの置き去りにされた鍵は畏でどこからかこれを拾う自分を狙っているのではないかなんて想像していた。念のため辺りを確認するが、その気配はない。改めて安堵した。ようやくだ。これで家に帰れる。

くるり、後ろを振り返った。もちろん、来た道を戻り帰宅するためだ。だが、篤は歩み始めるどころか足を止めたまま動かない。い

や、動かせないのだ。

左右は高い壁、前後は分岐路だらけでまるで先が見えない。簡単に言ってしまうえば、気づかないうちに箒は路地の中で迷子になっていた。同じ風景ばかりが続く中をずっと曲がり曲がって進んできたのだから、来た道に戻るのには至難の業。

「ついてねー……つか酷くね？　こんなとこに置き去りとか酷くね？」

思わず不満が漏れるが、もちろん誰からも返事はない。文句を言っても、立ち止まってもどうにもならないのは箒だってよくわかっていたが。

そして何を思ったか、箒は来た道を戻るところか真逆、つまりは進むはずだった道へと歩き始めた。やはり戻るのは不可能と考えたのかもしれない。

だが歩きはじめて僅か数秒、少し遠くに最初の角が見えはじめた時だった。視界に異質な何か映った。人の足と、スニーカーらしきもの。

反射的に一旦足を止めたが、またすぐに前進再開。誰もが持つ、怖いもの見たさというものだろうか。慎重に、一歩ずつ。近づくとつれ、鼻を掠める匂い。明らかに、異質なモノ。

それでも、足は止めない。徐々に視界に入る何かは増えていく。スニーカー、黒のスボン、そしてグレーの

ドン、と重たく響く音。どさ、と地に伏せる音。視界から入る情報はその途切れた。

鈍痛。異質な何かを前に、全神経がそちらへと注がれていたのだろう。その隙を突かれた結果がこれだ。箒は後頭部への衝撃に、間もなく意識を手放した。

スニーカー、黒のズボン、グレーのパーカー、そして散らばる赤異質何か。それは、男の死体。

篝の意識が無くなったことを確認すると、凶器を握りしめたまま何も言わず、ただ口元に恍惚とした笑みを浮かべていた。

「ちーっす、緋菜いるー？」

拍子抜けするほど明るく、元気の有り余ったような少年の声。ドアを勢い良く開け、彼が入った先。明かりがついているにも関わらず薄暗い部屋とは対照的だ。部屋の中のソファに一人、腰掛ける女性。鋭い視線を少年に送ると、ため息混じりに口を開く。

「……緋菜はんならちよつと前に出て行かれました。後始末、あの子が引き受けはったんよ」

「あ、言いたいことわーかった！ ノックしろって言いてえんだろ？ 悪かったって」

彼女のみるからに不機嫌な様子を察したのだろう、すぐさま謝罪の言葉を述べる。相変わらぬ軽快な口調に、反省の意が伴っているかは謎だが。女性はまた一つ、ため息をついた。

「しっかし、緋菜も気張りすぎじゃね？ 後始末ほど後味の悪い仕事ねーだろ」

「……仕方あらへん、異端が邪魔者扱いされるんは自然の摂理どす」

女性が腰掛けるソファと、透明なテーブルを挟んで向かい側。これまた材質の良いソファに少年もどかっとな腰掛ける。彼らにとっては他愛のない会話をしながら、緋菜、もとい六条緋菜の帰りを待つ

た。

暗い。目を覚ました簞は漆黒の中にいた。目の前に広がるものは、ただひたすらに、暗闇。ずっとこのままでいたら、本当に目を開けているのかどうかわからなくなってくる。ささやかな恐怖から逃れるように、ひたすら瞬きをした。

身動きがうまく取れない。どうやら、とても狭い空間にいるらしい。両腕が背中に回っているが、縛られたりはしていない。なんとか片手ずつ引つ張り出すと、上にあるもの　おそらく光を遮っているであろう何かを押し上げた。

「……どこだ、ここ」

まず、第一声がこれだ。ようやく太陽の光が拝めるかと思えば、寧ろ正反対。夜の闇に落ちたかのように辺りは先程よりやや涼しく、相変わらずの物寂しさだけが漂っていた。ひとまず、狭い空間からはい上がり、思いつ切り体を伸ばした。

俺は死んだのか？

次は、そんな考えにたどり着いた。起きたばかりでうまく回らない頭をなんとか働かせ、今までの粗筋というものを脳内で描いてみた。

黒猫に鍵を取られる。追いかけて路地裏に入ったものの、見失う。帰ろうと歩く。それから、だ。

襲われたのだ、後ろから。ふと思い出すと後頭部の痛みも目覚めたのか、じわじわと痛み出す。あの道の先にあったもの。確認する前に後頭部を殴られて、そのまま気絶したのだ　　あれは確か

に、死体だった。

あの時自分が殴られたのは、やはり口封じとして殺すつもりだったのだろうか。しかし、いまだ痛みはするものの血すら出ていない。おまけに先程とは場所が違う。殴った本人が移動させたに違いない。不可解な事象に頭を悩ませる篤。再び後ろが無防備なことには気づいていなかった。

「……………倉科……………」

聞き慣れたばかりの声。凜としてよく通る声に、疑問や不審といった感情が混じっている。立ち尽くす篤の後ろから、その声は投げかけられた。

いつもの制服姿とは一転して、漆黒に身を包んだ姿。時折風になびく黒髪。篤はゆっくり後ろを振り返った。六条緋菜の姿が、そこにあった。

3、いつもの君

目を少し見開き、見つめる先。あるはずのない姿がそこにあるから。

事態を理解しきれずに、ただただ呆然と立ち尽くす。口は半開きだ。あるはずのない姿がそこにあるから。

緋菜と篝。偶然か必然か、お互い思わぬ遭遇に驚きを隠せない様子だ。黒服に身を包んだ、いつもと纏う雰囲気少し違う緋菜。たった今、狭苦しい空間からはい出たばかりの篝。緋菜は何も言わず、少しずつ、歩み寄り始めた。

「あー……っと、ろくじょー、さん？　なんでまたこんなところで

」

行動に出た緋菜に対し、先に沈黙を破ったのは篝だった。しどろもどろに紡ぐ言葉。だが、それを最後まで言い切る前に、篝の体は反射的にのけ反った。緋菜のアップパーを避けるために。

「だあああああつぶねえ！？　何だよ何で！？　しかも何でアップパー！？？」

「騒ぐんじゃないわよこの馬鹿！　こんなとこで何してるのよ！　今何時だと思ってるわけ！？」

「はあ！？　お母さんかお前は！　だいたい何時かなんてこっちが聞きてーよー！」

小言の多いお母さんと不良息子　ではなく。緊張感のかけらもなく騒ぐ。見つめ合う。牽制するかのよう。

そういえば、時間を確認していなかったのだ。何せ今しがた太陽の下へ意識が戻って来たばかりなのだ。太陽は見つからなかったが。

何気なく携帯を取り出し、ディスプレイの右端にある時間を一瞥した。数秒置いて、また一瞥した。

「……ご、午前……一時……？」

「正確には午前一時二十四分。これがどういうことか、わかるわよね？」

想像を絶する結果に、またも口が半開きになる。確かこの路地裏に來たのは放課後。九時間近く意識を失っていたということになる。ため息混じりに述べた緋菜の言葉。彼女が何を言いたいのかは篝にもわかった。

この辺りには妙な暗黙のルールが存在する。『日付が変わったら、外を出歩いてはいけない』というものだ。しかしそれだけである。何故なのか、それはいろいろと憶測が飛び交っているが大人も子供も忠実にその掟を守っている。今まで、そのルールを破った人間はいない。少なくとも、破ったと自称する人間は。

「あたしの言いたいことはわかったみたいね。ならさっさと帰んなさい」

「俺だってそうしたいっての！ だいたい何処だよここ！ つかお前何してたの？ お前も帰れよ」

「……何だって良いでしょ。今から帰るところだし」

そう、意識を失う前から篝は現在地を把握していなかった。なに気が付いたら今度はどこぞの狭い空間へと詰められていたのだ。風景があまり変わっていないことからまだ路地裏にいるのであろうことは判るが、それだけ。

ふと素朴な疑問をぶつけてみれば、緋菜は少し目を伏せただけ。答える義務がないと言っのか、答えたくないのか。いや、答えられ

ないのかもしれない。その隙間を突かないわけにはいかなくて。

「ほーう……優等生の六条さんがこんな時間まで夜遊びか」

「馬鹿に何が解るのよ。掠ってもないわ」

「けっ、その態度が嘘臭いっての！ お母さんそんな子に育てた覚えはありません！」

「育てられた覚えもないわよ！」

間髪入れずに噛み付き返す緋菜。そんな短いやり取りに、篝は自然と笑いが零れた。訝しげに緋菜は篝を見つめる。彼女にとっては気味が悪いだけの笑いを零す彼を。

「わり、なんつーか……ほっとした。やっぱり六条は六条だな」

「……あんた大丈夫？ あたしは逆に心配なんだけど」

先程の笑いは安堵感から来たものだったようだ。だが二人の温度差はなかなかのもので、緋菜の目には余計気味が悪く映るだけだった。

「……俺、帰り道に野良猫に鍵取られてさ、この辺で追いかけてたら……なんか、後ろから殴られてさ」

ぼつり、おのずから話し出す篝。何故このタイミングで、何故緋菜の前でこんな話をしているのか。それは篝自身よくわかっていなかったが、黙って聴き入る緋菜に言葉を続ける。

追いかけてこの途中で、黒猫は見失ってしまったこと。後ろから殴られ意識を失い、狭い空間に押し込められていたこと。そして、意識を手放す前を見た、男の死体。全て話した。包み隠さず。

「……異臭がしたなら間違いなさそうね。あんたもつくづく運悪いわね……なるべく早く忘れなさい」

「……それだけ？」

「他に何を求めてんのよ。あたしに出来るのは話聞くぐらいよ」

諭した緋菜の口ぶりは、その裏に優しさを隠したものだ。早く忘れる。その通りだろう。自分が何かしたわけではないのに、死体を見ただけなのに、ここまで気負う意味はない。本当についてない、簞は改めてそう思った。

「……さ、帰るわよ。迷子なんですよ、着いてきなさい」

そう言っただけで緋菜は向き合っていた体を翻す。簞を迷子呼ばわり出来るのは、この路地裏の出口を知っている証。それだけ告げて、くると簞に背を向ける。そう、後ろを無防備な状態にする。

カチャリ。軽くて重い、金属が立てたような音。背後にそびえ立つ、小さくて大きな圧迫感。

「……なん、で」

動けない。蛇に睨まれた蛙の如く。冷静が完全に欠落し、残るのは絡まり合った思考回路のみ。やっとのことで搾り出した声は、うまく言葉に成ってはくれない。

「……動くなよ？ 弾、入ってるから」

いつもと変わらない、いつもと何一つ変わっちゃくれない口調。圧迫感を後頭部に突き付けられたまま、緋菜は言葉を失った。理解しろと言うほうが無理だ。さっきまでのクラスメイトは今日アンラ

ツキーマンになり、今凶器を自分に向けている。嗚呼、出来るものなら解説してみるがいい。

夜の冷たい風が頬を掠めて吹き抜けた。五月の夜はまだ冷える。しかし寒いと感じた原因は果たして、風か彼か。

4、交錯工作

静寂と暗闇。ただそれだけの中に、二人しか存在していないような空間。時折風が吹き抜けても、塵が舞うだけ。まばらな薄明かりと、晴天だった空から月が彼らを照らし見下ろす。

緋菜も篝も、何も言わない。ただ言わないのか、言えないのか。

「ねえ、どうということなの」

今度は、緋菜が先に口を開く。形勢逆転。完全に篝に圧倒されている。

確かに、問い掛けた。しかし彼は何も言わない。再び沈黙が続く。背後を取られた形である今、篝がどんな表情で銃口をこちらへ向けているのかなんて、緋菜には知る由もない。

「……何で、答えないの？ それとも答えられないの？ あたし達と“同じ”だから」

篝の答えを待たずに、またしても口を開いた緋菜。やや苛立ちを隠しきれしていない声色。あくまで強気な姿勢を崩す気はないのだからか。

再び投げかけられた問いに、少しの間を置いてようやく篝も口を開いた。

「……あんま急かすなつての。多分、お前が思ってる通りだからさ」

落ち着き払った、それでいて普遍的な声色。やはりいつもと変わらない彼の声からは、彼の心境を察することは出来なかった。不思議

議なこと、緋菜はすでに心理戦では負けているような気がしていた。箆だつて、こちらの心境を察するための材料はほとんどこの声だけのはずなのに。ただ一つ、背後を取ったあちらにアドバンテージがあるだけで。

「思ってる通り……ね。なら今までの行動は全部演技だつたつてことになるわよね？ 初めからわかってたんでしょ、何もかも」
「……そういうことになるな」

あくまで直球な質問はせず、唆すように問い掛ける。しかし、返ってくるのはすべて曖昧な答え。はつきり肯定しているとは取れないような。

そんな問答が、緋菜をさらに苛立たせる。否、これは焦りや恐怖心から来ているのかもしれない。

「はつきり言いなさいよ あんたはこの世界のことも、あたしのことも知ってるって。あの男の死体……あれもあんたがやったんじゃないの？」

我慢ならなくなったのか、ついには核心部分に触れた。無知への恐怖、とでも言うのだろうか。衝動的な何かが緋菜を焦らせ、行動させる。

箆は一瞬目を伏せ、彼女の言葉に反応を示したのだが、それを緋菜が知る術はない。唯一頼れる聴力で、彼が一つため息をついたのを認識した。

「言いたいことはそれだけか？ 気が済んだなら もう、いいだろ」

箆が一步前へ出る。緋菜の後頭部に、銃口とおぼしき金属部が触

れた。

嗚呼、終わりか。

必然的にそう思った。緋菜自身、人に恨まれることは山ほどしてきた自覚はあった。けれどわからない。何故彼の手で殺されるのか。逆恨みの類か。未練がましい、もうやめよう。

震える呼吸。そつと目を伏せた。そんな緋菜をよそに、箒は一切の躊躇いもなく　引き金を引いた。

カン、と甲高い音が響く。すぐ横の、金属製のごみ箱らしきものから。

当たっていない。結果だけ言えば、そういうことだ。まだ、生きている。恐る恐る緋菜は目を開けたが、ついさつき変わらない景色。そして気づけば、突き付けられていたものもない。

そして、後ろから唐突に笑い声が聞こえた。

「ふっ、あははははは！　じょーだんだつて！　俺なんか人が殺しなわけねーって！」

その声に振り向けば、腹を抱えて笑っている箒がいた。笑いが笑いを呼んでいるのだろうか、止まらなくなっているようだ。

何が起こったのか。理解するには少し時間が必要らしい。

「……あんだ、銃は」

「あ、これ？　エアソフトガンってやつ。弾ってのはこれ」

そう言って銃　否、エアソフトガンから小さなオレンジ色の弾を取り出す。見たところ、おそらくBB弾だろう。確かに、弾は入

つていたらしい。さっきの音は、この弾を隣のごみ箱らしきものに向けて打った音か。

「それって銃刀法違反なんじゃ……」

「弾の大きさとか、定められた基準はクリアしてる。たまたま持ってただけなんだけどな」

軽い調子で言っただけのける籾。普通はそんなもの持ち歩かないと思うんだが、これ如何に。あえて緋菜はそれ以上追及しなかった。

本当に、なんでもないようだ。あの問答は何だったのか。とりあえず、緋菜は籾に遊ばれたようなものと認識した。そう考えると怒りが密かに沸いて来そうだ。

「……で？ もちろん、洗いざらい説明してくれるよな？」

「……は？ 何を」

「世界がどうとか、お前がどうとか言ってたじゃん。あ、あの死体はお前も犯人知らないんだよなあ」

ああ、そういうことか。

緋菜は理解した。演技だ。あれは演技だったのだ。まるですべてを知っているかのように振る舞い、見事に騙されたわけだ。実際、当の本人は何も知らなかったのだ。

「……あ、殴んなよ？ あんなことしたのは悪かったけどさ、俺だつて必死だったんだよ」

顔色をうかがわれているような気がする。殴りそうな顔をしていたのだろうか、と緋菜はやや顔をしかめた。

おそらく、きっかけはあの男の死体だろう。殺した犯人を自分と疑ったか、もしくは自分の知り合いだと推測したのだろう。この辺

りの『ルール』を破っているのを目撃されたのだから、些か仕方ないだろうが。

「……わかったわよ。話せることは話してあげる。どのみち、何も知らないままじゃあんた死ぬし」

「……マジか」

さらっと緋菜は言い放ったが、篝の顔色は急に悪くなった。冗談だと言ってほしそうな顔だ。半信半疑ともとれるが。

ぐい、と篝の腕を掴むと、そのまま引つ張り歩く。何も言わない緋菜に、黙って篝もついていく。

しかし、少し歩いたところで緋菜の足は止まった。足だけではない。全身が硬直してしまったかのように、完全に静止している。どうした、と篝が尋ねる前に、緋菜が口を開いた。

「……わかったわ、誰があの子を殺したのか」

そう言つと、ゆっくり後ろを振り返った。同時に、篝は彼女の後ろへと追いやられた。

暗闇に覆われてよく見えないが、まっすぐこの道の奥。裸足で歩くような音がする。ゆっくりこちらへと歩み寄ってくる。明かりの下へとその姿をあらわにした瞬間、篝は思わず息を呑んだ。

異形。人間ではない、いわば化け物。見開かれた目は爛々と赤く光り、広く裂けたその口からは牙が覗き、涎か何かが滴り落ちていく。人型と言えば、耳が尖っていることを覗けばぎりぎり人の原形を留めてはいる。皮膚の色も手足の数も一緒だ。

化け物は、口角を吊り上げて笑っていた。全身に、鮮やかな赤を撒き散らしながら。

5、迎撃、反撃

細い路地、一本道。左右に逃げ道はない。後ろなら背を向けて逃げることになり、前には化け物が立ち塞がっている。

徐々に距離を詰めてくる、異形。つんと異臭が鼻を掠めた。その匂いに、篝は思い当たる節があった。数時間前、意識を失う前だ。あの死体の周辺と同じ。

「……な、んだよ、あれ」

「探す手間、省けたわね。まあ、一つだけ言えるのは……人間だけど人間じゃない、ってことかしら」

淡々と述べる緋菜。妙に落ち着き払った様子。彼女はあの化け物の正体も、そしておそらくは対処法も心得ているのだろう。どことなく篝はそう感じた。

人間だけど、人間じゃない。その言葉の意味はよくわからなかったが、今はそんなことを詮索している場合ではない。それくらいはわかっていた。

「なあ、どうすんだよ……」

「……さーて、どうしましょうかねえ」

緋菜は少し肩を竦めて、不敵な笑みを後ろにいる篝に向けた。おどけた調子の声と、その余裕な笑み。先程とは打って変わって顔面蒼白な篝とはまさに対照的。一体彼女が何を考えて今そんな顔をしているのか。ただただ、生きること諦めた笑みでないことを祈った。

一定のペースで距離を詰めていた化け物が、突然足を止めた。ま

だ緋菜達とは少し距離がある。数秒間を置いてから、ぎらぎらと光る目を見開き、口角を目一杯吊り上げた。

化け物が両手を振り上げる。その手にはいつの間にか、銀の細い刃が握られていた。それを見た瞬間、緋菜も動いた。

「走って！」

ただ一言そう告げると、箒の腕を強く引っ張り駆け出す。方向は後ろ。唐突な指令にも、なんとか遅れずに箒も走る。すぐ後ろから、風を切るような音。振り返れば、地面に突き刺さる銀色。走れば走るほど、銀色の数は増えた。

右折、左折、左折、右折、直進、右折、直進。左折。

再び路地裏での紆余曲折を経て、まだまだ走る。酸素を求めて、呼吸が荒くなる。そんな箒の苦しみを知ってか知らずか、緋菜は箒の手を引いたまままだ走る。

銀色の数がだんだんと減っていった。緋菜が減速し始め、止まった頃にはもう見えなくなつた。少し広い空間に出た。反射的に咳が出た。口の中があのマラソン後のような状態だ。

「……ま、撒いた……か……？」

「……残念ながら、無理そうね」

さらっと放たれる、絶望感たつぷりの言葉。しかし同時に焦りも何もなかったりするからわからない。いまだ呼吸の荒い箒は、緋菜がまるで先程と変わらず涼しい顔をしていることに気づいた。息もほとんど乱れていない。化け物はどっちだ　なんて思っていたら、再び風を切る音がした。

「……マジで来やがった……」
「しつこいわねー、鬱陶しい」

暗がりの向こう側から、やはりあの化け物が姿を現す。あちらもまた、息を乱していない。またあんなスピードで逃げなければいけないのか。そう考えて篝は顔を引き攣らせた。そんな篝を察してか、緋菜は告げる。

「……安心しなさい、鬼ごっこはここまでよ。あたしだって、何も考えずに走ってたわけじゃないの」

そう告げると、緋菜は篝の肩を軽く押した。下がっている、と言いたいのである。そして彼女は歩み寄り化け物に向き直った。この暗闇と一体化したかのような、彼女の背中を見つめる。

「詳しい話はあとにするけど、とりあえずあれ倒すから。血とか苦手なら目つぶってなさい」

篝のほうは見向きもせず、ただそう述べた。反論の余地も与えない、そんな静かな勢いがあった。緋菜は腰の辺りに手を添えた。何かの構えだろうか。彼女が武道を心得ているという話は聞いたことがないが。

よくよく見れば、その構えはまるで、刀を抜くような形だった。しかし、彼女は空を掴んでいるのみ。息を吞んで、彼女の背中を見守っていた。

ざあ、と風が騒ぐ。彼女を中心にして弧を描き流れる。綺麗な黒髪が横になびく。食い入るようにその姿を見ていた。

きらり、月の光でも反射したのか。彼女の右手から引き抜かれてゆく、光る刀身が視線を奪った。添えられた左手には鞘が。そし

て、黒い柄の先からすらりと美しい銀色の刀が姿を現した。

「……『日付が変わったら、外を出歩くな』。この辺りじゃ暗黙のルール。それはね、こういう化け物からあんた達“表側”の人間を守るためのよ」

首だけ少しこちらに向けた彼女が、左手に収められていた鞘を箆へ投げ渡した。真つ黒い鞘。まるで彼女そのものを現しているかのような。リアルな質感。夢幻ではないらしい。

緋菜の言葉に対し、箆はもう何も言わない。詳しい話はまたあとで、そういう約束だ。だから今、箆は緋菜の零す言葉たちを拾い集め、可能な限りで理解するだけ。

「深夜0時、この世界は姿を変える。血も涙も無い、弱肉強食の“裏側”の世界にね」

彼女が言い終わる、彼女が地面を蹴る、化け物が銀色の刀を放つ。体勢を低く保ち、目で追うのがやっとなほど常人離れしたスピードで駆ける緋菜。金切り声をあげて、無数の刃を飛ばす化け物。下手な鉄砲数打ちや当たるとは言うが、いとも簡単に、緋菜はそのすべてをかわす。

すぐに距離を詰めた。しかし化け物は怯むどころか、まるで興奮しているかのように騒ぐ。金属がぶつかる高い音が数回した。次の瞬間には、緋菜の体はふわりと宙に浮いていた。口には刀をくわえ、その両手には銃が握られていた。

数発の銃声。数回の金属の衝突音。化け物の悲鳴。箆と化け物を挟んで向こう側で、緋菜は化け物を見据えていた。両手にあつたはずの銃はない。悶える化け物。もつれる足で走り出す。こちらへ。

「……え、ちょ……ツマジか！ ちょちょちょい待ち！ 俺は関係

「ないとも言えないわね」

鞘を握ったまま腕をぶんぶんと振り回す簪、そんな姿が見えているのかいないのか、突進する化け物。そしてその手が迫る前に、頭上から緋菜と刀。よく見えないがおそらく首の後ろ辺りから、刀が深々と突き刺さっている。断末魔の悲鳴をあげて、砂のように脆く崩れた化け物の体は、風の中の塵と化した。

「……終わっ、たな……終わっただよな……？」

「ま、見ての通りよ。マラソンと絶叫お疲れ様」

化け物だった何かは、すでに風に吞まれて跡形もなくなった。ようやく安心しているのかと、簪は大きく息を吐いた。緋菜は鞘をふんだくると、その銀色を中に収め、彼女の手の中からふっと姿を消した。

「……なあ、それどうなってるの……？ あと関係ないとは言えないって何すつげえ怖いんだけど」

「あんま急かさないでくれる？ 多分、あんたの想像通り　かしらね」

不敵な笑みをこちらに向ける。要はどや顔だ。その台詞には聞き覚えがあった。脳裏に浮かぶのは、つい先刻の自分。

「あたしももう疲れたし、移動先で話すわ。長くなるけど死にたくなきゃ真面目に聞くことね」

「……へいへい」

嗚呼、とんでもないことになった

スリルなんて可愛いも

んじゃない、本当の命の危機。何時間も前の自分の行動を振り返り過去の自分を責めてみる。意味がないことは籌自身わかっていたが。彼は無事この不思議の国を出られるのか。出口はまだまだ見えない。

6、騎士宣言

「……で、何をしてらっしゃるの」

相も変わらず風の音しかない路地裏に、篝の疑問の音が空気を震わせる。頭の上に両手を置く、その姿は目の前で作業する緋菜をまっすぐ捉えている。緋菜は壁に向かって何かを書いている、ように見える。彼女の背中で塞がれてよく見えないが。

「もう終わるわよ……っと。はい、行くわよ」

「壁の中にツスカ」

「あながち間違ってないわ」

どっちがボケたのか、それはご想像にお任せしようと思う。しかしまた何で 聞く前に、緋菜は壁をぼん、と押した。すると、壁はみるみる木製のドアに変わったではないか。おもむろにドアを開ける彼女。手招きされて、仕方なく緋菜のあとに続く篝。トンネルの中のような一本道をしばらく進む。そしてもう一度、木製のドアを開けた。

「着いたわよ。その辺のソファにでもかけて頂戴」

「すげえな……なんか驚きも薄くなってきた」

さっきからよく考えたら、驚いてばかりな気がする。何でもありだな、なんて思いはじめた。見渡す限り、黒で統一された部屋。テーブル、カーテン、本棚も黒。言われるままに腰掛けたソファももちろん黒だ。少しして、ティーカップを持って緋菜が戻ってきた。置かれたその中身はストレートティーらしい。向かいに緋菜が腰掛けた。

「……何から話せば良いのかしらね。めんどくさいから問答形式でいきましょ」

「なんつーいい加減な……まあいいや、じゃあ世界の表とか裏とか、そんなのからで」

詳しく話さないと死ぬとか言った身がこれだ。投げやりっぷりが時間に比例している気がするが、責めたところで悪化しそうなのでやめておく。とりあえず、一つずつ疑問を解消していくとしよう。

「世界ね……あなたが普段起きて学校行つて寝る生活してるのが表裏つていうのは、それ以外が活動するところ」

「なんか俺が単調な暮らししてるみたいな言い方なのは何で？」

「ん、違つた？ あと日付変わったら外に出るなつて話。あれはあの時間に裏の世界の奴らが動き出すからよ。さっきの化け物だったり、異能の力を持つてたりね」

ティーカップを口元に運びながら、淡々と緋菜は説明する。この際突つ込むべきではないのかもしれない、そう篤は思いはじめた。

緋菜の述べた“異能の力”とやらに少し反応を示す。思い当たる節、それは緋菜の右手から引き抜かれた刀。そういえば、いつのまにか銃も持つていた。いつのまにか、どちらも消えてしまったが。

「異能の力、つて……お前のも？ あれどつから出してんの？」

「そ。あたしは裏表、両方で生きてるからね。まあ……強いて言うなら、頭の中かしら」

「ちよつとそろそろ意味わかんねーッス」

「想像したものを出せる、そういう力なの。あたしの場合、実物に触れたことある武器だけだけど。異能の力つていうのは本当に人の数だけ種類があるんだけど、想像を具現化する力は大抵の能力で必

要ね」

つまり、彼女は頭で想像した武器を実体として出せるというわけだ。そして見たところ出し入れ自由。大抵の能力で必要となると、異能の力を持つ人間はみんなイマジネーション能力を要求されるというわけだ。学歴がものを言う自分たちの……表の、世界。そこで学力を問われるようなものか。

「時間で世界が区切られてるから判るだろうけど、本当は裏の人間が表の世界で生きることは許されてない。けどね、裏の世界を総轄する組織に認められたら、多少制限はあるけど普通に暮らせるのよ」「逆はありなのか？ 表の人間が裏の世界で生きるっていうのは」「良いわよ、まず生き残れないけどね。表の人間は基本異能の力がないから、まず殺されるわ。裏の人間は、自分の力で弱い人間をいたぶるのがだい好きだから、ね」

そう言つて不敵に笑つてみせる緋菜。若干血の気が引いた、気がする。そんな心境を察したのだろう、「あたしは違うわよ」と付け足した。信じてはいたものの、その言葉を聞いて正直安心した。

「ああ、裏側のトップのことだけど。組織の名前は“箱庭”。メンバー構成は数人なんだけど、全員がSランクの能力持ち」

「組織とかあんのか……能力はランク付けされてんの？」

「裏側は組織だらけだから。それはあとで説明するわ。能力は高いほうからS、A、B、Cの順でランク分けされてるの。Cは気づいてないレベル、それが弱小。Bはそれなり。一番多いかな。Aは名のある組織でトップレベルの人間ぐらいね。Sは次元が違う。ごく一部だけど、同じランクの人間じゃなきゃまず太刀打ち出来ないわね」

へえ、と言葉とも言えない言葉を返す。表で生きてるってことは多分自分には関係のない話なんだろう、そういう理屈からやはり遠い世界の話としか思えないのだ。

「これくらい知ってたら大丈夫かしらね。残念だけど、一度裏側に関わった以上あんたは裏の人間として見做される。だからこうやって基礎知識を与えたってわけ」

「はあ……！？ 俺能力とか何も持ってねーぞ」

「そうじゃなくて、裏の世界の存在を知った以上、裏の人間も同然なの。本来表の人間で裏の存在を知ってる奴なんて政府のお偉方ぐらいよ」

「冗談じゃねーよ…… お前まず生き残れないって言ったよな。死ぬってことかよ？」

「そこまで無責任じゃないわよ。ちゃんと対策は考えてあるから、その辺の本でも読んでちよっと待ってて」

絶望感に囚われつつある篝を一人部屋に残し、緋菜はどこか別の部屋へと消えてしまった。今度は何をやる気なのだろうか 考えたって、予想の斜め上に行くのだろう。仕方なく、篝は自分の真後ろにあった本棚に向かう。しかし本棚というわりには、ファイル類が多々紛れ込んでいる。その一つを取って中を流し読みする。

「……事件簿、みたいなの？ 聞いたことねえな」

おそらく、これまでに起こった事件を纏めてあるのだろう。内容を見比べたところ、被害規模はピンからキリまである。どれも聞いたことのない事件だ 異能の力絡みだとか、表には一切関わりはおろか知ることもないことなのだろう。

だがその中で一つ、聞き覚えのある名前を見つけた。『アカバナ研究所爆発事件』と書かれた纏め書き。事件自体は十年以上も前の

話だが、あの原因不明の爆発による研究所の崩壊、そして関係者は全員死亡と報じられた。この事件はニュースで扱われていたのを何度か耳にしていた。ただその時は、“事件”ではなく“事故”だった。

眉間にしわを寄せ、凝視する。あの事故は裏側絡みだったということになるのか。資料を隅々まで読むが、残念ながら新しい情報は入ってこない、何も解明されていないのだ。

「……それ本じゃないわよね」

「ぬお、つと……いつから居たんだよ」

突然背後から掛けられた声に、肩と心臓が跳ねた。驚きを隠そうと冷静さを装うが、さて通じるのか。振り向けばいつの間にか元のソファに再び腰掛け、優雅に紅茶を飲む緋菜の姿がそこにあった。案外早かったな、とは思っていたがわざわざ口にするほどでもないだろう。

「あたし今、ちょっとうちのボスに相談しに行ってたの」

「……ボス？　つか、何を？」

緋菜がティーカップに戻す。数秒の間。緋菜はじつと篝の顔を見つめた。返ってくる答えに予想がつかない篝。ごくり、唾を飲む音がする。そして緋菜がゆっくりと口を開いた。

「あなたの敵は、あたしの敵。あなたを狙う奴らは、全部あたしが倒す　　今日から、あたしがあなたを守ってあげる」

そう、それは突然の騎士宣言。^{ナイト}

7、暗躍と危険とお勉強

鳥の声。カーテンの隙間から差し込む光。篝はベッドの上で目を覚ました。

「……………あー、そっか……………」

寝ぼけ眼を擦りながら、まだ少し疲れが取り切れていないような声で呟いた。そうだ、やっと帰ってきたのだ。何日かぶりに家に帰ってきた感覚。昨日の出来事が強烈すぎたせいだろう、実際帰ってすぐにベッドに倒れ込んだのだ。よく見れば格好も制服のまま。

時計は六時十分を指している。この時間なら余裕だ。身支度を整えながら、頭の中で昨日の出来事を思い返した。

＊＊

「……………待て待て待て！ なんつだそりゃ！ 俺がお前に守られるつてのか？ どこのお姫様だ俺は！」

「あんたに拒否権なんてあるわけないでしょ。どうしても嫌なら死になさい」

「うっ……………」

返す言葉がない。篝だつてまだ十五年しか生きていない、これから楽しい高校生活が待っているのだ。黒猫に鍵を奪われた、それだけのことだったはずが世界の秘密まで知ってしまった。そして今は緋菜に守られなければ生きていけないという情けない状況。素直に受け入れるのは癪だ。

「だいたいさ、なんで俺のことなんか助けてくれんの？ ただのお

隣りさんだろ」

「あたし達の組織は主に表の人間を守るためにあるの。見過ごすのはボスと組織の名前に泥を塗ることになるし、あんたともずっと一緒にいなきゃいけないわけじゃない」

「へえ……そついや組織のこと、まだ聞いてねーぞ」

ああ、と緋菜が思い出したように返事をしたところで、ドアを軽くノックする音。緋菜は席を立ち、ドアの側で誰かと話している。ちようど彼女の背中がよく見えないが、聞こえた声は女性のものだった。

「わかったわ、じゃあお願い」

「ええ、任しとき。ほんならそつちもよろしゅう頼みます」

柔らかな印象を与える、京訛りな女性の口ぶり。女性が入ってきた代わりに、緋菜は出ていってしまったようだ。声一つくらいかけてくれたって良いものを。

こんにちは、と愛想のいい笑顔を浮かべて女性は言った。ぎこちなく篝も返したが、女性はくすくすと笑うだけ。

「そんな堅くならんでええんよ？ 緋菜はんはちよつと用事がありますさかい、戻るまでウチがお相手します」

「あ……はい、えつと……倉科篝、です」

「篝はんやね。ウチは楠木色葉いいます。青色の『色』に葉っぱの『葉』で、『いろは』で読むんどす」

そついつて色葉は軽くお辞儀をする。変わった名前だ、というところでは何か親近感。自分の名前だつて嫌いじゃないが、どこから『篝』なんて持ってきたのがさっぱりわからない。一つ一つの仕種に呼応するように、綺麗な黒髪が揺れる。下のほうで白いリボン

によって一つに纏められているが、見たところかなりの量だ。手入れが大変だろうな、なんて他人事だけれど。和風美人という言葉がぴったりな女性、そう思った。

「そうそう、篝はんにはウチらの組織とか、まだ説明してなかったんやねえ」

「あ、はい。六条はあとから説明するって言っていましたけど……」
「忘れてはったねあの子」

くすくすと再び笑みをこぼす色葉。ああ、やっぱり忘れていたのか。どつりであんな反応されるわけだ。そしてこの女性はそれにしっかり気づいていたのだろう。ここに来て緋菜の怠慢さが滲み出つつあるのだが、これ如何に。

「そうやねえ……まず、裏側にはウチらみたいな異能の力持ったもんが集まる組織がいっぱいあるんどす。裏側は一人でおったら確実に誰かが殺しに来るから、こつやって身を寄せ合って安全を求めたんが始まりやね。けどそのうち組織の目的は色々出来てな、ウチらみたいに表の人間守ったり依頼貰て人を殺したりと多様化しはつたんよ」

「……物騒ですな」

「仕方あらへん、こつちの世界じゃ色々制限はあつても一応殺しは合法なんどす」

とにかく物騒だ。篝はそう感じた。殺し殺されがこの裏側の世界の常識なのはよくわかった。だから尚更その常識の中に組み込まれるのは勘弁してほしい。殺しが合法なら、そして緋菜が自分を守らないと殺されるといふのなら、自分が殺されるのもやはり合法なだろう。全く以て理解に苦しむ。

「で、裏側のトップの組織“箱庭”。あの人らが戒律を決めてはつて、だいたい違法なんは表の人間に手出すことやから……ま、言うてしまえば裏側なら何してもええいうこと。あんまり目立つことすると箱庭さん直々に殺されるんやけどねえ」

「……箱庭つて、偉いんですか」

「そら偉いよ、ウチら裏側の人間がこの世界で生きてもええようにしたんはあの人らや。元々はウチら異能の力を持った人間は間引かれる運命やった。それを表のお偉いさんと話し合つて解決したんは箱庭さんやからねえ……度が過ぎたこととして殺されても文句は言われへん、下手したらまた昔に戻つてまうかもしれへんやろ？」

そう話す色葉の目は、どこか暗い影を落としていた。裏側が今のような世界になったのはつい最近なのかもしれない。箱庭の人間たちが動かなければ、裏側の世界は存在すらしなかつたのだから。殺人を違法とするまで至らなかつたのが惜しいところだが。

「そうそう、ウチらの組織は“黒”。メンバーは二十人おらへんけど、こつち側じゃトップレベルの組織なんよ。表の人間守るのが主な仕事やけど、まあ他にも依頼で色々扱つとります。ちなみに仕事用の名前があるんよ、ウチは『黒蝶』、緋菜はんは『黒猫』どす。ウチと緋菜はんと、あともう一人アホと三人で幹部やつとります」

「幹部つて……もしかして六条つて凄い奴だつたり」

「しはるねえ。Aランクでボスの次に強いし、ずっと前からウチの主力やつたし。光栄なことなんよ？ 緋菜はんみたいになちよつとした有名人に守つてもらえるなんて」

「逆に怖いような……」

ははは、と渴いた笑い声がこぼれる。ここでいう有名人というのがどの程度かわからないが、名の知れ渡っている人間に守られるのは逆に危ない輩を呼び寄せそんな気がしていた。かと言って、弱い

ボディーガードははつきり言って意味がないのだが。
と、タイミングよく再びノック音が二回。どうぞ、とすぐに色葉
が答える。誰かと思えば緋菜が戻ってきた。

「……お早いお帰りで」

「ああ、待たせて……ないわね。さ、帰るわよ」

「これまた唐突な……」

このあと、もちろん簞は緋菜から何か話があると期待していた。
しかし、彼女は話さなかった。色葉も何も言わない、ただ「気いつ
けてなあ、ほんならね」とにこやかに別れを告げられただけだ。納
得がいかにまま、引きずられるように談話室を後にした。

* *

数刻前

「……あんれ、緋菜じゃん。おつかえりい」

「翔梧……あんたまた寝転がってお菓子食べてたでしょ」

コツン、と緋菜のブーツ音がよく響く廊下。無造作な色素の薄い
茶色の頭に、眠たそうな眼をこする少年。見た目は緋菜とそう変わ
らない。

「ん、よくわかったなオイ……食べかすついてた？」

「ええ。知ってた？寝転がってお菓子食べてると耳の穴にアリや
ゴキブリが入っ」

「ストープ！やめ！この話やめ！言いたいことはよくわか
った！」

淡々と述べる緋菜はいつも通りなのだが、事実をありのままに伝えるその姿勢には冷やかかさすら感じるものだ。少年は指で口元の食べかすを軽く払うと、ペろりと口の周りを軽く舐めた。

「……………で？ どうだったんだよ」

「身元確認はまだだけど……………あたしが殺したのは能力墮ちで間違いないわ。ただ、あの能力からして倉科を襲ったのはあいつじゃない。気絶させておく意味がわからないのよ」

「能力墮ちがあいつみてえな迷子を殺さねーのは確かに変だな……………つてことは」

「第三者の仕業か、裏で操ってる人間がいるか……………かしらね」

“能力墮ち” それは、自らの持つ能力に呑まれた者を指す。

その名を出して初めて、そういえば箒に説明していないことに気づいた。また面倒が増えた、そういいたげな顔つきで深くため息をついた。

「考えたって今はわからないから、とりあえず今は保留ね。なるべくあいつは見張っておくから」

「……………マジで守る気かよ、あいつのこと」

それだけ言い残して去ろうとした緋菜の背中に、翔梧は問い掛けた。少し驚いたのか、緋菜は目を丸くして振り返った。何か言いたげな表情からは、自然と彼が反対意見を表明しているのだと感じられた。

「当たり前でしょ……………あいつはあたしのせいで巻き込まれたの。責任くらい取るわよ」

「……………じゃあ、俺があいつを殺すって言ったら？」

静かで、トーンの低い声。緋菜は彼がいつもは明るく活発な人物であると知っていたが故、尚更驚いた。冗談で言っているわけではない。もし今、なら殺せと一言告げたら、彼はすぐにでも箒を殺すだろう。彼のその目は本気なのだ。だがその中に、何かへの恐怖があることに気づいた。緋菜は翔梧に歩み寄ると、右手を彼の頬へと運び、軽く抓った。

「……大丈夫。あたしは死なない」

とても優しい微笑みを浮かべ、宥めるようにそう言った。今度は翔梧が目を丸くしている。彼は箒を守ることで、自分がより危険な目に遭うことを危惧していたのだ。遭う必要のない危険にまで身を晒すことになる、そんなことは緋菜自身百も承知だった。

じゃあね、と一言告げて、緋菜は今度こそ立ち去った。翔梧は何も言えず、ただ去って行く緋菜の背中を無言で見送った。

「……そう言っつて、あいつも死んだんだよ」

ただ一つ、誰に言うでもなく言葉を零して。

「……つまり、俺を殴った奴とお前が倒した化け物は別物、ってことか？」

「その可能性が高いわね。あと化け物じゃなくて咎人」

「とがびと……？ ああ、そうだっけ……つか覚えること多過ぎ！」

緋菜の引率で、只今箒は帰宅途中。時刻は深夜四時になろうとしていた。街頭と夜目の利く緋菜だけを頼りに、なんとか家路に着い

ているのだ。その間に、問答形式で再び裏側というものを勉強。

この間に新しく聞いたことと言えば、あの時緋菜が倒した化け物は元々ただの能力持ちの人間だったということだ。それが原因は多々考えられるが、自らの持つ能力に吞まれ殺人衝動だけで動く化け物 咎人と言うらしい になってしまったとのこと。またその現象を“能力墮ち”と言うんだとか。ああなつてしまえばもう元には戻れず、殺すしか手立てはないらしい。

そして、あの化け物、いや咎人は箒を殴った犯人ではないのにと。理由は咎人が誰かを気絶させただけで殺さないでおくわけがないから、らしい。前例がないことから判断したそうだ。なら誰だ、と問いたいところだが今となつてはわからない。

「あのさ、能力墮ちつてのは……お前とか、色葉さんもなる可能性あんの？」

「誰にでもあるのよ、あれは。精神的に追い詰められたり、肉体的に衰弱したりして能力を制御出来なくなった時、能力に吞まれて咎人になるの。持ってた能力が強ければ強いほど危険な咎人が生まれるしね」

能力は生きてるのよ、と緋菜は付け加えた。なるほど危険視されるのも納得がいく。いつ化け物になるかもわからないのに、一般人に紛れて暮らすことを許されるわけがない。実際今、箒も少なからず恐怖を感じた。

「とりあえず今あなたに言うておくことは、裏側のことは絶対に喋らない。怪しいことには関わらない。あたしとは学校でも今まで通り接すること。約束して」

「要は何事もなかったように過ごしゃ良いんだろ？ 俺だつて危ない目には遭いたくねーっての」

たった半日でまるで激変してしまつた人生。しかしまだ普通に生活出来るらしく本当に安心した。忌ま忌ましいこの記憶はすぐには消えないだろうが、そこは時間の流れに任せるとしよう。とにかく、なんとか守られた生活を大切にしたい。

そしてなんとか愛しきホームへと到着。数年ぶりに帰ってきたかのような懐かしさ。本当に戻つて来られてよかつた。それじゃ、と別れを告げようとした篝の言葉を制するよつに、緋菜が口を開く。

「……ねえ、あんた何であたしのこと信じちゃつてるの？ 裏側の奴らが危ないつてことは散々聞いたわよね。ちよつと優しくされたら信じてる様じゃ、あたしはあんたを守り切れる自信はない」

少し、咎めるような口ぶり。篝は言葉を詰まらせた。彼女の言わんとしていることを、理解するのに少し時間が必要だつたのだ。しばらく沈黙を置いてから、篝は答えた。

「だって、お前優しいじゃん。今だってさ、俺にもつとちゃんとか気いつけるつてわざわざ忠告してくれただろ？ んな奴ほつとけば勝手に死ぬのにさ。死んだらお前は御役目御免、向こう見ずな馬鹿を守り切れなくて責められやしねーだろ」

齒を少し覗かせて、さも当然のように笑う。面食らつて、緋菜は少し顔を赤らめた。なんせ面と向かつて優しいと言われたのだ、反応に困る。こんな真つ暗闇の中じゃ、気づかれることはそうそう無いだろうが。

「ま、ほとんど直感みたいなもんだけどな。とりあえずお前だけ信じとく」

「……好きにすれば。明日、遅れるんじゃないわよ」

そう言い残して去った緋菜の言葉は呆れ果てたようにも聞こえるが、そんなことをいちいち気にする篤ではなかった。とりあえず、今日は寝よう。その一心で、家に入るとそのまま疲れ果てた体をベツドの中へと潜り込ませた。

8、パラレル・ワンルーム

とあるマンションの一室。南側の部屋、窓とカーテンに遮られながらも良い具合に日が差し込む位置。それを目覚まし代わりに、重たい体を起こす。しかし時計はすでに昼過ぎを指していた。

散らかった部屋の数少ない足の踏み場を慣れた動作で通ってみせる。デスクの上のパソコンを起こし、すぐ隣の壁にかけてある日めくりカレンダーを一枚更新。小さな紙に『五月十八日』の文字がかでかど掲げられてある。

寝起きにはお決まりのコーヒー牛乳を用意し、いざパソコンの前に鎮座したところで、カラン、と軽い何かの落下音が響く。この部屋のどこか、それも聞こえたのは奥のほうから。部屋の異常を探す足は、最終的に新聞受けの前で止まった。おもむろにその口を開いた。

「あ……？　なんだ、コレ」

不機嫌そうにつぶやく。思わず。新聞受けから転がり出てきたのは、宝石とおぼしき透き通った石。周りに控えめではあるが装飾されている上、銀のチェーンの流さからしてこれはネックレスだ。何故こんなものが入っているのか。通販などで注文した覚えはないし、そもそも商品素っ裸で突っ込むバカがどこにいる。

考えてもわからないようだ、そう思って思考を止めた。なにせゆっくりしてられないのだ。早々にパソコンの前に戻り、それを起動させた。日常の大半を占めることになる、それを。

とある教室の一角。倉科篤は机に突っ伏していた。ちょうど今日最後の授業が終わったところだ。ちなみに化学。そんな篤を横目に、緋菜はいそいそと帰る支度に取り掛かる。

「……ろくじょーさん、化学わかんない」

「なんであたしに聞くのよ……出来る友達持つてんでしょ」

「あれ？ 六条は俺の友達じゃないのかな？」

「そうね、勘違いよ」

緋菜の返答はいつもそうだ。単調、淡泊、その上毒を忍ばせている。男子に分類される篤としては、そんな会話が出来ただけ特別ではあるのだが。どうやら緋菜の視点からは篤が友達だろ、と都合の良い言葉を利用したテスト前に慌てる愚か者に見えたようだ。

そう、テスト前。明日からは中間テストが待っている。高校生活初めてのテストなのだが、生憎篤は勉強を好むタイプではなかった。わずか二ヶ月足らずで躓いた化学ももちろんテストが課される。

緋菜が勉強の出来る人物だということは、少し親しい間柄では有名なことだ。彼女の裏事情を知る自分からしても勉強に使える時間はそう多くなさそうだが、彼女が何かで躓いているところを見たことがない。

そういえば、あれから裏側のことに巻き込まれたことは一度もない。堂々と話題に上げられることではないので特にその手の話もしていない。不思議なほど、篤はいつもと変わらない毎日を送っている。

「ま、せいぜい頑張りなさい。同志ならたくさんいるでしょ」

帰る支度を終え、立ち上がった緋菜。……ホームルームもいつの

間にか終わっているではないか。それにしても、あんなにそそくさと支度を済ませるのには今日は何か用事があるのだろうか。それじゃ、とお愛想の一言を残し去ろうとした緋菜、の肩にぼんと手が置かれる。

「どーこ行くつってんだい、緋菜さんよう」

「……笑顔全開でどうしたのよ、かもめ」

弾けんばかりの笑顔をたたえ、緋菜の両肩をがっしりと掴んで放さない女子生徒。輝かしいその顔とは対照的に、緋菜は胡散臭いものを見る目だ。

「忘れたとは言わせないぞ！ 今日わたしとマック行く予定だろ

ー！？」

「……あ、うん」

「いや、どう見ても忘れてたよなお前」

嗚呼、なんと白々しいことかこの女。肩を強く揺すられながら何食わぬ顔で嘘をつく。隠そうと思ったのかさうでないかは定かではないが、とりあえず下手だ。

焦げ茶色のセミロングの髪に、小さな花飾りのついたオレンジ色のカチューシャが特徴の女子生徒、水橋かもめ。ひどく賑やかで顔の広そうな、緋菜の友人。特徴的な名前と持ち前のテンションの高さで篝も顔と名前はすぐ覚えていた。おまけに緋菜と話すようになってから、向こうから話し掛けてきたりもして。なんだかんだで篝も結構仲が良い。よく二人が一緒にいるところは見かけるが、何故緋菜と仲が良いのかはわからない。

「悪いけど、用事出来たからまた今度ね」

「あ、あっさり断ってくれるな君……！ あたしより大事な用ってなんだちくしょう！ 泣くぞこらー！」

「仕方ないでしょ……ちょっと面倒な用事が入っちゃったの」

喚くかもめを宥めるでもなく淡々と事実を吐く、言うなればそんなところ。女子はもう少し誠意というか申し訳なさそうに事情を話してみせるものだと思っていたがしかし。

そして気づけば、言い終えた緋菜の目線はじつとこちらを見ていた。そして、離れない。何かを訴えているような、そうでないような　と、考えを巡らせているうちに緋菜は再びそれじゃ、と一言置いて教室を去った。

「……まったく、しょうがない子だよ！　けど仕方ない、この際二人で語ろうじゃ　」

「悪い、俺も用事あるからまた！」

「へ？　あ、ちょ……ッ、置き去りー！？」

悲痛なかもめの叫びも簞の耳には一切入っていないかった。どこるかすでに脳内から抜け落ちていた。ただ何となく、緋菜を追おうと思った。急いで教室を出たが、すでに緋菜は遙か遠く。わずかに捉えた小さな姿を追っていった。

「……じ、じ、じ……」

「もう諦めたらどないですか？　瀕死の蝉みたいですよえ」

組織“黒”、談話室にて。暇を持て余した翔梧と色葉がしりとりをしていた。と言っても、翔梧が一方的に持ち掛けた誘いに仕方なく色葉が構ってやっているに過ぎないのだが。

また、翔梧に学と呼べるものはほとんど無い。なのに何故、ボキヤブラリーの豊富さが問われるこのゲームを選んだのか。それもまた、翔梧に学が無いことが由来するのだろう。

「じ……つか、俺は緋菜が来るの待ってたんだよ。あいつが来れば終われんだよこれ」

「なんや緋菜はんに構って欲しかったただけですか？ せやけどあの子、今日から仕事入ってたはずやから帰ってけえへんよ」

「は、はあ！？ そ……そんなこと一言も言ってるねーだろ！ つかマジかよ何だったんだよこの時間！」

喚き散らす翔梧には目もくれず、色葉は本棚に並べられていたファイルの一つに手を伸ばす。ぱらぱらとめくり、一枚の書類を取り出した。無言で差し出された書類に翔梧はざっと目を通し、思わず苦笑いした。

「……おいおい、これまためんどくさそーな」

「うちらにとっても異例やったからねえ、あの子は進んで引き受けてくれたけど……まさか、ニートのボディガード勤めさせられるなんて」

「……どうしたらニートが狙われる事態になるんだ」

駅から徒歩五分、とある高級マンションの十七階からの遠景を眺めつつ、篝は尋ねた。ホームルームが終わったのち、急いで緋菜を追い掛けたは良いが、同様に急ぐ彼女の足の早いこと。追いついた

時にはもうこのマンションのすぐそばだった。

「正直わからないことだらけなのよ。守る相手は二トで、命が狙われる危険性が高いから守ってくれって。おまけに裏側の事情は一切バレないようにしろって話だし」

「よくそんなの引き受けたな……」

「こっちの事情話すなっことは表側の人間の可能性が高いし、それが命を狙われるって言うんだから不思議なんだけど」

どうやら入ってきた情報が少なすぎるらしいが、この日の夜から数日このマンションに住む二トを守ってほしいとのこと。裏側の人間ではなさそうだが相手は命を狙ってくるときた。なるほどこれは面倒な仕事だ。断ることは出来なかったのだろうか、と一瞬尋ねようとしたのだが、表側の人間の命が狙われるというのに黙っていられるとも思えない。何の言葉にもならず、沈黙が続いた。やがて、一つのドアの前で緋菜が足を止める。

「あんだ、ついて来るのは勝手だけど自己防衛ぐらいしてよね」

「……やっぱ危ないか？」

「なんとも言えないわ。あたしも下手に銃や刀は使えないし」

言い終えるや否や、緋菜は鞆を漁り出し、一つの小さな鞆を取り出した。中を見れば、どうやら自己防衛道具らしい。緋菜の左手を見ると、いつの間にか金属バットが装備されてあった。銃やら剣やらが出せないとなると、ああなるのだろうか。……そもそも、金属バット持って「あなたを守りにきました」って信用しがたいにもほどがあるのではないか。

そんな篤の気も知らず、緋菜はインターホンを鳴らす。少しのやり取りを終えて、ドアが開いた。

「……お前らかよ、クソ親父の言ってたボディーガードって」

ぼさぼさの短い黒髪に、グレーのＴシャツと黒いジャージ。けだるそうな目と、けだるそうなアルトボイス。姿を現したニートとおぼしき人は、ひどく無気力に溢れた女性だった。

＊＊

路地裏の片隅にある、小さな一室。まだ日は高く登っているにも関わらず、差し込む光は少なく外を賑わす子供の声も皆無。そんな部屋の磨りガラス越しに、ソファに座った青年は外を　　実際に見えるものはないだろうが　　ただじつと見ていた。

「……何を見てらっしゃるのかしら」

凜とした女性の声が部屋に響く。台所でコーヒーを二人分入れながら、何気ない口調で尋ねた。少し間を置いて、青年は体も顔も彼女へ向けることなく語り出した。

「……夜を、待ってるんだよ。今夜ね、今夜。とてもとても楽しいことが起こる。……は、はは。ふ……ッあはははははははは！　何でかなあ、わかるんだよ俺！　今日俺は、運命的な出会いをする！　“彼”とは違う、俺に最ツ高の快樂を与えてくれる人に！　今夜、この街の路地裏で、必ず！」

狂ったように笑い出した彼を気にかけることはない。それが彼女のだと、彼女はひどく理解していたからだ。彼の前のテーブルにコーヒーを置くと、ようやく彼は振り向いて、とても優しい顔で「あ

りがとう」「と告げる。彼の二つの赤い瞳は、なおも興奮を隠し切れず、爛々と輝いていた。

9、一泊二日もどき

「……まー、とりあえず上がれば？ 何もねーけど」

大口を開けて欠伸をしながら、女性は二人を部屋に招き入れた。緋菜は数秒躊躇ったが、仕事だと割り切ったか部屋の中に歩を進める。その様子を見て、篝もその後ろを着いて行った。

「その辺に適当にかけて。飲み物はコーヒー牛乳しかねーぞ」

玄関から通された部屋。目の前に広がる光景に緋菜も篝も硬直した。漫画や雑誌、郵便物、衣類、その他諸々。ありとあらゆるすべてが、その床に散らかっていた。そもそも床が見当たらない。諸々で床が成り立っている。ソファや椅子が見当たらない、つまりかけるところなどないわけで。女性はと言えば、パソコンの置かれたデスクの前に座っていた。篝と緋菜は思わず顔を見合わせた。お互い戸惑いを隠せない顔で。

「……あの、仕事の話なんですけど……心当たりは」

「んー？ ああ、守ってくれんだっけ……ねーな。つか、まともに外にも出てねえのに誰の恨みを買うんだよ」

先に口を開いたのは緋菜だった。しかし出た答えは心当たりがない、と。それよりも篝は『まともに外に出ていない』発言のほうに耳に残ったのだが。そんな言葉を交わす最中も、女性はじっと画面を見つめカタカタとキーボードを叩く。

「……六条さんよ、どうすんだ」

「……まあ、最悪守れたら依頼は果たしたことになるし……強行手

段に出るしかないわね」

本人からも情報が何一つ入らなかった。緋菜が引き受けた仕事の内容は確か命を狙われるらしい二トを守ること。最悪詳しい状況がわからずとも、狙ってくる奴を倒すなり何なりしてこの女性を守り通せば良いのだろう。どうも納得いかないが。

緋菜は少し腕を組んで考えたあと、パソコンの画面からまったく視線をそらさない女性に向けてある提案を出した。

「あの、いきなり訪ねてきて無礼は承知なのですが……あなたを守り通すまでここにいても構いませんか」

「ん、いーよ別に」

「いいんだ……」

適当だな、と内心思った。半分ほどすでに口から漏れてしまったが。それにしても、いつ狙いに来るかもわからない相手だ。明日になっても来なかつたらどうするつもりなんだろう。まず今日、じき夜を迎えるというのに。

そこでようやく女性が椅子から立ち、床に散らばったものを押し分けたり積み上げたり。どうやら場所を作ってくれているようだ。自分たちが立ちっぱなしであることに今気づいたのだろうか。さっきからどこか楽しげなのは気のせいかな。

「泊まるなり好きにすりゃいーよ、押し入れに布団あるし。あ、晩飯頼んでいいか？」

「……倉科」

「……え、俺？　なんで俺なの」

完全にお泊りモードなわけだが、何故か回ってきた夕食係に篝は戸惑いと煩わしさを思いつ切り表情に出した。一人暮らして自炊に

は慣れているものの、何故わざわざ緋菜からご指名を喰らったのが謎だった。そもそもこの女性の順応性が異常だ。見ず知らずの間をあつさりと泊める。自分たちが高校生だからなのか。

仕方ない、自ずからそう自分に言い聞かせて台所へ向かう。何となく、逆らえる気がしなかったのだ。「中のもので適当に使ってー」と女性の脱力感溢れる声が届く。お言葉に甘えて冷蔵庫の中身を拝見する。これまた適当かと思えば、意外にも様々な食材が綺麗に収納されている。さて、何を作ろうか。

一方緋菜はといえば、夕食の準備を簞に任せたことにより暇を持て余していた。手伝えばいいじゃないか、という考えはないらしい。先程女性が空けてくれたスペースに座り込み、積み重ねた雑誌などをばらばらとめくる。横には相変わらずパソコンと向き合う女性がいる。何の気無しに、その画面を覗いてみた。

「……あの、これは」

「ん？ 無料オンラインRPG、まあネットゲだよ」

はあ、となんととも言えない返事もどきが漏れる。何をしているかと思えばネットゲーム。左上の辺りには『ファンタジスタ・クロニクル』の文字が見え、画面には森のようなステージに四人のキャラクタが映っている。その下にはチャット画面らしいものがあり、キーボードを叩く音はここで会話していたがためのようだ。手慣れた手つきで操作、会話をそつなくこなす。

「……もしかして、慣れてます？」

「そりゃまあ、毎日一日中これしかしてねーし。……あ、お前ら名前は？」

徐々にこの二トの生態が掴めつつある。まともに外に出ていな

いのはこのネットゲームで一日を過ごしているからだろう。しかし
買い物ぐらいいは行っているのだろうか　そもそも、収入減はどこ
にある。ニートと呼ばれる意味合いは掴めてきた。

名前は、と問われてまだお互い名乗ってもいなかったことに気づ
く。仕事とはいえ今回は隠すほうが面倒だ　そう思い、組織から
与えられたものではなく本名を名乗る。ついでに篝の名前も。する
と女性は“じゃあ”スイでいいよ、と言った。もちろん“じゃあ”
の意味を問おうとした　しかし、それを制するかのようにスイは
話し出した。主にこのネットゲームの話だったが。

何をしに来たのか、本気で忘れかけた。そのくらい何も起きる気
配はなかった。篝が夕食を作り、それを食べ、後片付けは緋菜が担
当した。スイは変わらずネットゲームに打ち込み、緋菜と篝は時々
それを見たり、床にあったものを讀んだり　このまま何もなけれ
ば、何しに来たんだと文句を言いながら帰ることが出来れば良かった
のだが。

どれくらい時間が経っただろう。篝はいつの間にか眠っていた。
座って壁に背中をつけたまま眠っていたようで体が固まってしまっ
ている。記憶が途切れる前と変わらない二人の姿が目に入り、徐々
に頭も冴えていく。そして思い出した。仕事の途中だということと
今、またあの夢を見ていたということ。

「あ、起きた……眠いなら布団敷いて寝ていいぞ。つか緋菜は良い
として、お前親大丈夫なのか？」

スイが視線をこちらに移して告げる。どれくらい寝ていたのだろ
う。部屋に時計が見当たらない、あるのは角度の悪いベッドの上の
小さな目覚まし時計くらいか。カーテン越しでも、窓の外の暗さか

ら夜なのは把握出来た。右の手元に一冊の本が見えた。読んでいる途中で挫折したのだろうか。

スイの問い掛けには、一人暮らしなんで、と返しておいた。自分がどこに寝泊まりしようと文句を言う者はいない。それは出迎えてくれる者もないということなのだ。

二人が寝るまではなんとか起きていよう。立ち上がり、伸びをしたところで、軽快なインターホンの音がした。

「ん……？ 誰だよこんな時間に…… 篝、行ってこい」

「人使い、荒くないですか……？」

そうは言いつつも、欠伸をしながら玄関に向かう。立ち上がったついでとも言える。そんな篝を見送りながら、スイは怪訝そうな顔をして呟いた。

「別に宅配とか頼んでねーし……まさかこの前の？」

「スイさん、それ……」

訪問者が本当に想像できないらしいスイが、手の中に何かを収めている。それを見つけた緋菜が反射的に食いつけば、スイは緋菜の目の前に差し出してみせた。スイの自宅に数日前届いた、綺麗な寶石のネックレスだった。

「なんか、この前新聞受けに入ってたんだよな。全く身に覚えがねーんだけど」

ぶらぶらと目の前でスイはそのネックレス揺らす。見つけたのかもしれない、と思った。彼女が今回命を狙われるきっかけ、もしくはそれに繋がるものを。何せ日常生活の中で新聞受けに高価そうなアクセサリーが入れられていた、なんて出来事はまず有り得ない。

なんとも押し付けがましいプレゼントだ。そうして、嫌な予感がした。

この宝石がスイのもとに届いた、それが原因だとすれば。現在の持ち主が返還を求めてやってくるというのだろうか。そして命を狙う可能性がある。それほどまでに価値のある代物なのだろうか？

緋菜はポケットに入っていた携帯を取り出した。今回の依頼主と連絡を取ろうとした。正解には依頼主本人ではなくその仲介人であり、組織から連絡を取る必要があるため今向こうにいる誰かに頼もうとしたのだ。そして画面の右上、時刻を見　すでに世界が反転していたことに気づいた。

刹那、床に重く鈍い音が響く。スイもそれには気づいたらしく、明らかかな不審さに表情を変えた。緋菜は金属バットを握り、走って玄関へ、篝のもとへ向かう。そこにあつたのは地に伏せた篝と、宅配の姿を借りた誰か。

「……あれ？　一人暮らじゃねーのかあ……？　まいつか。俺が何しに来たか……わかるよなあ？」

粘着質、耳障りな声。開け放した扉の前で気味悪い笑みを浮かべる男を、緋菜は無表情で見つめた。地に伏せていた篝が咳込む。目立った外傷は見当たらない。

「おい、何だよこれ……！」

「倉科、立てる？　スイさんを連れて逃げて」

自分の後ろで声を上げるスイ。状況も男の言い分もわかってはいないらしい、緋菜もそれは変わらないのだが。とにもかくにも、すべきことは明確だ。篝にそれだけ告げると、男に金属バットを向ける。宣戦布告。口角を吊り上げて笑う男に、構わず突進して行っ

た。金属のぶつかる音。相手も似たようなものを所持していた。緋菜は力で押し、スピードで押し、ぶつかる金属音は少しずつ遠ざかって行った。あれは間違いなく、裏側の人間だ。そう確信していたが故に容赦はしない。

「……っおい、大丈夫か……!？」

「大丈夫……腹殴られただけ、ですよ」

声は少し弱々しいものだったが、なんとか立ち上がった。腹に一発、重いものを食らっただけ。喧嘩なんてするタイプじゃないからよくわからないが、あんなに重いものなのだろうか。

そしてちゃんと耳に届いていた緋菜の言葉。それを実行すべく、スイの手を掴み外へ出た。緋菜と男はもう見当たらない。大丈夫だろうか。もちろんそんな心配もしたのだが、彼女は強い。あの化け物を瞬殺したのだから。そう言い聞かせ、スイの手を引いて走り出す。

【テオ：あれ、あれれ？ 針山さんが動かなくなっちゃいました!】

【ケロ子：トイレか何かじゃないですかねー?】

【テオ：えーでももう十分は経ってますよう……】

【あんな：私たちの知らないところで、運命に翻弄されているのかもしれないね……】

【ケロ子：えっ何ですかその意味深発言……?】

【テオ：妙にカッコイイですけど、どうしたんですか!?!】

主のいなくなったパソコンのチャット画面で、何も変わらずに文

字が動く。日常から切り離された者たちを置いて。

10、からくり転がり

甲高い音がぶつかり合う。ひっそりと物音ひとつしない踊り場で、最後に鈍い音をひとつ叩きだして、また静かになった。倒れたのは、男のほう。階段の下で息を荒くして転がる男を、冷やかかな目で見つめながら緋菜は階段を降りていく。左手にはやや形の悪い金属バットが握られている。

「……っ、どういうことだあ……？ お前、どこの差し金だ」

「そんなの、こっちが聞きたいんだけど。あんた何なの？ スイさんを狙う目的は何」

蓄積したダメージで男はもうほとんど動けなくなっているらしい。声に覇気がない。お構いなしに、緋菜は男の喉元にバットを突き付けた。すると男は一瞬怪訝そうな顔をしたが、すぐに意地の悪い笑みを浮かべた。

「なーるほど、なあ……あんた、ほとんど聞かされてねえな……？ 思い出したぜえ、黒猫さんよお……」

無様な姿になってもなお、苛立ちを煽るような口ぶり、声、表情。もう一発殴つてやろうかと疼きかけた感情をなんとか抑え込む。ただここで気絶させては、せっかく追い詰めたのに情報を吐かせられずに終わってしまう。冷静さを欠けばそうなるところだった。

「娘が狙われると思って護衛をつけたってことかあ……？ さすが社長、ネットワークが広大なこった……俺らも回りくどいことしちまったなあ……」

今度は緋菜が表情を変える。怪訝そうな、と言つよりは不審がるような表情。少しずつ理解し始めたような男の言葉は、緋菜にはまだ謎の言葉の羅列に過ぎなかった。

「スイ、ねえ……まあ偽名を名乗るのは妥当かもなあ。なんせ二階堂グループの令嬢さん二階堂翠ともなれば、本名言い触らして出歩けねえよなあ……嘘だと思つたら、聞いてみるんだなあ」

ますます意地悪く笑い、笑い声まであげる男。そんな男を視界には捉えながら、混乱し始めた頭の中を整理しようともがいていた。つまり、つまりだ。まず、スイは偽名。本名は二階堂翠。表じゃ有名な二階堂グループの、令嬢。誰に言われようとも、信じろというほうが無理な気がする。

今は仮に、スイが二階堂翠であり、社長令嬢であるとする。これはその身代金だとかが目当ての襲撃か。しかし、この時間帯なら表側の人間が接触してくるはずがない。だから間違いなく、この男たちは裏側の人間。その上、裏側の人間は基本的に表の人間を襲撃になど来れはしない。箱庭に裁かれて終わりだ。嗚呼、意味がわからない。

「……吐く気はないぜえ、黒猫お」
「なら、しばらく寝てもらつわよ」

この程度なら幾分仕方ない気はするが、やはり見抜かれたか。今この場ですべて吐かせることが出来たら一番手っ取り早い。かと言って下手に能力でも使つてスイにでも見られたら、依頼人の言葉に背くことになる。だから仕方ない。緋菜はバットで男の頭を殴り、気を失ったことを確認してから走り出す。うまく逃げていることを信じて、二人を探しに。

＊＊

「…………ツなあ、まだ、走んのか…………？」
「撒くまで、止まらない、です…………！」

途切れ途切れに疲労を訴えてくるスイ。その手を引き前を走る簞も、すでに息切れが激しい。けれど、止まらない。後方からはまだ走る足音が聞こえる。

緋菜と別れて部屋を出て、マンションを出るまではよかったのだがそこで待ち伏せていた輩に遭遇してしまった。あの男の仲間であることはすぐわかったので、結局捕まるわけにもいかず今だ逃亡を続けている。

「ちよつと、止まれ…………考えが、ある」

そう言つて無理矢理足を止めるスイ。焦りが表情に出ている簞をよそに、スイは走ってきた道を振り返る。追走者たちが追い付いた。皆肩を上下させ息を切らしていることに変わりはないが、奴らの浮かべる笑みにはまだ余裕がありそんな気がした。素人の感覚だが。

「…………てめえら、目当てはこれだろ」

そう言つてスイがポケットから出したのは、綺麗な宝石のついたアクセサリー。いつから持っていたのか。彼女の部屋にいた時は見当たらなかったはずだが。一応、平静を装つてはいる自分たち。だが簞は混乱し始めた思考回路に動揺しそうになっていた。

「見に覚えのねーもんで追っかけ回されんのは理不尽だろうが…………さっさと持つて帰れハゲ」

「言葉遣いが悪いな姉ちゃん…………ま、潔くて助かるぜ。これで目的の…一つは達成した」

そう言ってアクセサリーを投げて向こうへ渡してしまった。怒りや苛立ちを含んだスイの言葉に、篝は今彼女に話し掛けるべきではないと悟った。触らぬ神に祟りなし。良いのか、との声すらも掛けられない。

受け取った男　スイの言った通り頭が残念な男は、相変わらずニヤニヤと笑ったまま。後ろに控えている仲間たちも同じ表情。目的の一つ、という言葉には引っかかるものを感じ、話を続ける男の言葉に耳を貸してやった。

「だが残念　もう一つの目的は、姉ちゃんの身柄確保だ」

その言葉が言い終わるや否や、奴らはこちらへと距離を詰めはじめた。篝は思わず舌打ちし、再びスイの腕を掴み走り出そうとしたが。

「な、なんだてめえ！　どっから出てくぼっ」

「いやー……悪いね、ちょっと邪魔だったからさ。あ、もう聞こえてないか」

次々に聞こえてくる、鈍い音、たたき付けられるような音、そして悲鳴。自分たちと向かい合っていた男たちも目を見開き後方を振り返った。驚きと、未知のものを見る恐怖。篝たちも突然の出来事に動けずにいた。

「寄ってたかって女性と少年を追いかけるなんて大人げないっていうか……はい、俺はとも呆れました」

男たちが薙ぎ倒されていく中で、よく通る声の一つ。次第に取り巻く男たちは残り五人に。ようやく姿を確認できた。少し尖ったよ

うな暗い茶髪。スタイルの良い長身の青年。だが何よりも印象的なのは、彼の瞳。鮮やかな赤。彼が歩み寄ると男たちは後退する。やがて動きを止め、彼はとても柔らかい笑顔をこちらに向けた。

「やり方が汚いよねー本当。あの子たちもまだ訳わかんないだろうし、俺が一肌脱いじゃおっかなー……ああでも、まだ一人足りないや」

ぺらぺらと話しながら、頭の残念な男に近づき馴れ馴れしく肩を組んだ。軽く悲鳴をあげた男を見て、彼はくつくつと小さく笑みを零していた。

「……おい、知り合いか……？」

「少なくとも、俺のでは……」

こちらに味方するように見える男の言動。だが、警戒せざるを得ない。何か危険な香りとも言うのか、異質なものを感じていた。スイの問い掛けからすると彼女の知り合いでもないようで、また訳がわからなくなった。

「 倉科！」

凜とした声に名前を呼ばれる。即座に声がしたほうへと振り返った。駆け寄ってくる緋菜。そこで簞はようやく安堵した。無事に合流出来たことにほっと胸を撫で下ろす。

「……何があったの？ それに、あいつは……」

「ははっ、来た来た。やつぱりね、俺は正しかったみたいだ」

訝しげに尋ねる緋菜には何も言えずにいた。なにせ何もわからない

い。よくわからないうちにスイは宝石を渡してしまい、奴らは目的がどうとか言ったあと、目の前の異質な彼に怯えている。

その彼はと言えば、駆け寄ってきた緋菜を見て目を輝かせ、嬉しそうに笑った。男から腕を離すと、彼は再び話し出す。

「先日、あの有名な二階堂グループの社長に一本の電話がかかってきた。内容は『そちらの人間がうちの宝石を盗んだ。三日以内に返さなければ家族にまで被害が及ぶ』と。ことをおおっぴらにしたいくなかった社長は信頼できる人間だけを使い事実だと確認、しかし盗まれた宝石と犯人は見つからず、知人を通して娘にボディガードをつけてもらった……それが君だ、二階堂翠」

饒舌な彼の言葉には一つ一つ、人を聴き入らせる何かがあった。あつさりした説明で細かい点はよくわからなかったが、彼が最後に述べた言葉、そしてスイを見つめたことにより少し見通しが出て来た。そして、遅れて驚愕した。

「……は？ え、スイさん……え？」

「本当だよ、あたしのくだりはな。多分全部、本当なんじゃねーの」

今度はスイが舌打ちをした。不機嫌そうな顔ではあるが、彼女もまた黙って彼の言葉を聞いていた。緋菜のほうへ視線を移すが、まったく動じていなかった。知っていたとでも言わんばかりに。すでに何か他のことを考えているようだった。

「まあ電話をかけたのは彼ら……無名の悪党集団なわけだ。昨日が約束の三日目だった、だから日付が変わった瞬間に自分たちの立場を利用し襲撃した。でも残念、ボディガードが凄腕だったんだよねえ。君達の無茶苦茶な作戦、あれは彼女の身代金でも貰おうと考えてんだらう？ 宝石を盗んだ犯人は君達、それを彼女の家に送り

付けたのも君達だ。そりゃあ見つかるわけない」

嘲笑うように吐き捨てたあと、彼は宝石をまだ手に持っていた男の腹に、思いつ切り蹴りを入れた。地面に転がる男。彼は男には目もくれず手からこぼれ落ちた宝石を拾い上げた。

そこで、直感ではあるが簞は感じていた。この男は、危ない。ただの味方なんかじゃない、能ある鷹だ。早くこの場を離れたほうが良い。だが動けばどうなるのか？

「て、めえ……三つ首……！」

「あれえ、君らみたいな底辺でも俺のこと知ってくれてるの？ 嬉しいなあ」

につこりと優しそうな顔に柔らかい笑みを浮かべる。非常にこの場にそぐわない、だが言葉通り嬉しそうに笑っている。しかし次の瞬間にはそんな表情は何処かへ失せてしまった。もう一度男の腹を蹴り、残りを殴り、蹴り、片付け、また笑った。

「みんな俺のこと適当に略してくれるけどさあ……俺にはケルベロ三つ首の番犬スって名前があるんだよね」

本名じゃないけど、と肩を竦めて付け加えた。三人とも、もう確信していた。肌を感じる危険、身を包む恐怖。彼はおもむろにこちらへと向き直る。身を凍らせた二人をよそに、緋菜は数歩前へ出る。空気すらもこの一触即発の雰囲気を感じているかのように、音のない世界で彼らは対峙していた。

11、犬と猫

ごくり、唾を飲む音が聞こえた。背中を嫌な汗が伝う。視線が彼から外せなくなっている。

「倉科、ここから離れて」

どこか重たい、緋菜の言葉。こちらには見向きもしない。否、彼女も目の前の存在から視線を外せないのかもしれない。ちら、と彼を見るが、彼は薄く笑ったまま緋菜を見つめている。何も言わないが故にまた、何を考えているかわからない。

恐怖を振り切って、箒は再び走り出す。スイの手を引いて。薄々感じ取っていた。緋菜はおそらく、彼と戦う気だ。もちろん状況がどう転ぶかにもよるが、そうなった時は緋菜も行動に出るだろう。だからここに自分たちを、特にスイを置いてはいけないのだ。

「追わないのね……まだ聞きたいことがある。答えてもらえる？」

「ま、俺の目的じゃないし。構わないよ、答えられる範囲でなら。」

あ、スリーサイズはだめー」

軽快に笑う彼。彼が箒たちを追わないか、内心ひどく心配していたのだ。止める自信はもちろんあるが、相手の能力は未知数だ

緋菜は“三つ首の番犬”の名に聞き覚えがあった。姿も能力も判明していないが、要注意人物としてその名を聞いたことがあったのだ。

「あんたが倒した奴ら……裏側の人間で間違いないわね」

「うん、BかCランクの雑魚の集まりだよ。だから日付が変わってから彼女に襲撃を仕掛けた、彼女が裏側を知らないのを良いことにね」

「……箱庭にバレたら終わりじゃない」

「相手が相手だからねえ……事を穏便に済ませたがることを見越して自分たちに有利に運ぼうとしたんだろう。うまく欺くつもりだったんじゃないかな」

この男は、憶測で語っているのだろうか。それとも、すべて知った上でややはぐらかしているのか。緋菜にはそれが見抜けなかった。食えない奴。さてこの話、どこまでが真実なのか。

彼が言い終わると同時に、手に握られていたアクセサリーが投げ渡される。なんとかキャッチしたものの、驚きを隠せない顔で相手を見つめた。

「いらないし、あげるよ。ちなみにそれ偽物ね、ただのガラス玉」

「……何でも知ってるのね。あんた何なの？ 何が目的なの」

渡された宝石、否、ガラス玉をポケットにしまう。一応、まだ捨てないほうが良いと思って。そして冷たく、刺々しい口調で問い掛ける。彼があの子の集団の一員であるとは考え難い。だが、彼はすべてを知っているかのように一連の事件を語ってみせる。

「さあ、俺って一体なんなんだろうね。こっちが聞きたいよ。けど目的ははっきりしてるよ 君と、ちょっと遊ぼうと思って」

真面目のような適当のような答え。言いながら、彼は先程自分で倒した男たちの所持品を物色している。特に止めようとは思わず放っておいたが、その一つ一つの動きからは目を離せずにいた。言い終わり、物色も終えて立ち上がり、戻ってきた彼と再び対峙する。にこにここと笑う彼の手には、小さめの刀が握られていた。

「君、組織の中じゃボスの次に強いんだってね。数年前は違う誰か

だった気がするけど……ねえ」

まあいいや、と小さく付け加え、鞘から刀を抜いた。街灯を反射して刃が煌めく。彼の手から離れる鞘。落ちる音は耳に入らなかった。

「俺はね、戦うのが大好きだ。肉を斬る感触も、血飛沫も、痛みに歪んだ顔も、全部全部愛おしい！ 生か死かの駆け引きの中で、死に物狂いで俺を殺そうとしてくる。“戦い”の中にあるすべてが愛おしくて堪らない！ だから俺は、そんな最高の快楽を与えてくれる人を探してる」

感情の高ぶりが、興奮が、抑え切れなかったそれが目に映る。狂気じみたそれを、彼の二つの鮮やかな赤から見出だしていた。今になって、その綺麗な赤がひどく不気味に感じられる。

「……本当は、もう一人見つけてるんだけどね。今日俺はもつと素晴らしい人に出会える気がしてた。君だよ黒猫。ねえ、君なんだよ」

一度ああなると、しばらく戻れないのかもしれない。案外冷静なまま、緋菜はそう考えていた。手の中の金属バットを無に返す。残念ながら、これでは役不足だ。代わりに右手に握られたもの。真っ黒い鞘に収められた、先日も活躍してくれたあの刀。何を使うか迷った挙げ句、一番使い慣れているものにした。美しい刀身が姿を現すと、三つ首は嬉しそうに笑った。

「受けてくれるんだ。嬉しいな」

「……逃げられないだけよ」

その言葉を合図に、同時に地を蹴った。自然と、裏側に生きる者

としての本能的な何かがそうさせたのかもしれない。ぶつかり合う高い音。先程金属バットでぶつかり合った時とはまるで違う、内面から相手の殺意がじわじわと侵食してくる。いや、殺意と言えば少し語弊があるかもしれない。殺したいというよりは、痛めつけたがっている、ような。

時折、鋭い痛みが全身を駆け巡る。掠めた傷口から赤色が舞う。それに抗うことはしない、だからこそ怯まない。それは相手も同じ。実力は互角か。だが、一閃。一瞬の隙を突いた。緋菜の細い刃が三つ首の右肩を貫く。

引き抜かれ、開かれた距離に鮮血が飛ぶ。よろめいた彼を無表情で見つめ、刃に残った血を払い落とす。血はとめどなく流れているが、あまり深い傷ではないだろう。やがて向き直った彼は、再び笑っていた。

「あはは、やられちゃった。でも俺、今たまらなく幸せだよ」

言葉だけ聞けば普通だった。だが目の前にいる男の声は興奮で震えており、とても恍惚とした表情を浮かべている。出来ることなら、さっさと始末してしまいたい。そうは思うが、簡単な話ではない。相手の持つ力はまだまだ計り知れていないのだ。

「……………く、はは、あははははは！！　ねえ、そろそろ本気出してもらえるかな？　俺そろそろ我慢の限界だからさあ」

ようやくか、と緋菜は構えた。今までは小手調べ、もしくはそれ以下だろう。あいにく緋菜は好戦的なタイプでないため、彼に付き合ってやるつもりはさらさらなかった。チャンスさえあれば心臓を貫き、終わる。いつも通り、狙い討つだけ。ぎゅっと刀を握り直し、再び緊迫した空気が流れ出した、瞬間。軽快なメロディが辺りを包んだ。

驚愕。呆気。なんとも言えない表情で彼らは静止した。鳴り止まぬその正体に、まず気づいたのは三つ首。ポケットから震える携帯を取り出し、耳に当てた。が、すぐに離し、ため息をついた。

「…………ごめん、時間切れだ。俺帰らなきゃ…………ほんつと先生つてば空気読めてない」

「…………は？」

こればかりは、聞き返さずにはいられなかった。だがそんな緋菜を放置して、三つ首の男は緋菜に背を向け去って行く。呆然と立ち尽くす緋菜を、彼は最後にもう一度振り返った。

「続きはまた今度だねー。でもすぐ会えるよ…………近いうちに、迎えに行くから」

不敵に笑ってみせたあと、じゃあね、と一言告げて彼は路地裏の暗闇に行方をくらませた。それからしばらく、緋菜はその場を動けずにいた。夢見心地、とでも言うのか。あの男に会ってから今までがまるで現実味を感じられなかった。だが、体に残る痛みは本物。一旦、この件は置いておくことにした。そして再び駆け出す、守つてやるべき人たちのもとへ。

「…………簞、ここ本当に安全なんだな？」

「俺があいつに騙されてなきゃ、安全です」

緋菜に促され、彼女を残し逃亡を謀った簞とスイ。彼らは今、黒のワゴン車の後部席に居た。どうやら知らないうちに緋菜が手を回

してくれていたらしく、走っていたところをこのワゴン車に乗っていた色葉と男性に発見され拾われたのだ。

「緋菜はんならきつと戻ってきますえ。それより、あんさんらが今出来ること考え」

助手席に座っている色葉が告げる。きつと戻ってくる、もちろんそう信じてはいる。けれど落ち着かない。

「つーかよ、お前からこれからどうするんだ？」

「……どうするべきなのかな、って」

運転席に座る男性が振り向き、尋ねる。男性の名前は川嶋というらしい。外見はどこにでもいそうなあごひげの三十代男性だが、緋菜や色葉の仲間だと言う。見た目だけでは判別できそうにないな、と改めて思ったものだ。

それより、今後の話だ。もともと“スイを守れ”という明確なようで漠然とした依頼だった。それがよくわからない陰謀に巻き込まれていたようで、妙な男には出会うし、逃げてみれば追っ手の気配は皆無。事態はどこへ向かっているのか 悩める二人に救いの手、もとい後部席の窓を叩く音がした。

「六条……」

「遅くなった、ごめん。スイさんも無事？」

簞がドアを開けると、少し息を切らし、また体の数カ所に傷を負った緋菜の姿。思わずそのことに触れようとした彼を緋菜は言葉で制した。乗り込み、奥に座っているスイの姿を見て、お互い安心したのかほっと息をついた。

「テツさん、色葉もありがと」

「いいっていいって。それよりさっさと片付けてくれ……策はそろそろ見つかっただろ」

欠伸をしながら川嶋が答える。愛称はテツさんというようだ。彼の言葉に緋菜は頷いた。そして篝とスイに向き直る。

「緋菜、怪我してんのか……？ あいつは……」

「大したことないですから。あいつは……門限で帰りました」

最後の一言には全員が疑問符を浮かべた。やや考えてその言葉を搾り出したようだが、緋菜すらも怪訝そうな顔をしている。問いただしたかったが、緋菜がとにかく、と言葉を続ける。

「やることは簡単です 乗り込んで、一匹残らず殲滅するだけ」

冷たい言葉と冷たい口調。一瞬、篝の頭に浮かんだ。あのいわゆる悪党集団を薙ぎ倒し、壊滅させる緋菜の姿が。

12、父と娘

「……あの、殲滅ってことは」

「敵陣に乗り込んで痛い目みてもらう、ってこと」

しれっと物騒な発言を再びしでかした緋菜ではあるが、篝は早くもそれに慣れつつあった。困ったことに変わりはないのだが。

「まあ、あとでちゃんと話すけどあいつらのしたことは法律違反なの。箱庭に報告する前に締め上げて手柄頂くってこと。殺すわけじゃないわ」

「……もうやだお前怖い」

小声で篝にだけ聞こえるように緋菜は告げた。多分、死なない程度に痛めつけるんだろう。篝の頭の中ですでに出来上がっていた緋菜という鬼のイメージが消えなくなってしまった。さすがに少し同情する。裏側のお仕置きは恐ろしい。

「けどその前に……スイさん、お父さんと連絡取ってもらえますか？ 許可なく依頼主とは接触出来ないんで」

緋菜の頼みに、スイは俯き押し黙ってしまった。首を縦にも横にも振らず。緋菜を見れば、表情を変えることなくスイの返事を待っている。スイには答えられない複雑な理由がある。彼女を見ていれば篝自身そんな気がしていたし、緋菜もそのくらいは察しているのだから。

「……ボディーガードが話したがってる、って言えば良いんだな」

「ええ。あとは任せてください」

意を決して顔を上げ、しぶしぶ承諾したスイ。そんな彼女を見て、緋菜はわずかに微笑んで頷いた。スイがズボンのポケットから黒い携帯を取り出し、耳にあてた。静かな車内に通話音が響く。

『もしもし……翠か？』

「……てめえの依頼したボディガードが話したがってる。代わるぞ」

無愛想にそう言い捨てると、緋菜に携帯を手渡した。不機嫌さをあらわにしたまま、スイは窓のほうへ顔を背けてしまった。篝は何と声をかけていいかわからず、ただ黙っていた。

「突然のお電話申し訳ありません。娘さんは無事ですが、少し状況が変わったのでお話をさせていただくことがあるのですが」

『ああ、ありがとうございます……構いませんよ、聞かせてください』

スイの父　つまり依頼主である二階堂グループ社長と話しはじめた緋菜。完全に仕事モードに入っている。黒スーツが似合う、そう思った。そして、何故こんな時に激しくくだらないことを考えたのか、と思った。

『……要は、この話は無かったことに……ということですか』

「ええ。明日には例の方々には刑務所なのでこの件は忘れてください」

さつきからまったく表情を変えずに話すから、篝はますますこの女が怖かった。敵に回したらこうやって無慈悲に裁きが降る。それが裏側のルールなんだろうが。そのまま緋菜とスイの父親は二言三言話して電話を切った。話はまとまったらしい。聞きたいが聞けな

い、スイには聞かせられないこともあるのだ。

「色葉とテツさんは二人を送ってあげて。翔梧手空いてるかしら」

「翔梧はんはここ数日暇してはるさかい、連れてったって」

「一応気をつけるよ。暴れてこい」

非常に軽いノリで進む会話を、篝はぼーっと聞いていたわけだが、よくよく考えればこれは敵を殲滅する話だということを思い直した。この裏側の空気に流されないようにしよう、慣れは怖い。

「それじゃスイさん、あたしはこれで。この件はなるべく早く忘れてください。倉科もお疲れ、家まで送ってもらいなさい」

「……いろいろと不満が残るんですけど六条さん！」

「激しく同意。けど今日は疲れたしもういいや」

スイに携帯を手渡しで返し、車を降りる緋菜。徒歩で向かうのだろうか。そもそも敵の本拠地はわかっているのだろうか。不満の声を少しばかり上げてみたが、まあ聞いてもらえないだろう。確かに今日は疲れた。後部席で緋菜の小さくなる背中を見送りながら、篝たちを乗せたワゴン車も帰路へ着くため動き出した。

カツン、カツン、と靴の音が響く。深夜の裏側じゃ当たり前の静けさ。大して気に留めず、緋菜は歩を進める。一つの鉄の扉の前に来たとき、ようやく彼女は足を止めた。

「……ここだな。あとは任せたほうがいいのか？」

「そうね。一人残らず叩き潰せばすっきりするでしょ」

「へいへい……そんじゃま、俺はここで見張りでもしてますよっ」と

欠伸をしながら、一緒に来ていた翔梧が告げる。彼は先程まで組織の拠点で寝ていたのだが、彼の能力を必要としている仲間のためにわざわざ出向いたのだ。とは言ってもその仕事、道案内は終わってしまった。一人で暴れる気満々の緋菜は扉を開けて中へと進む。近くの壁に背中を預けて、翔梧はもう一度欠伸をした。

「……あ？ 誰だてめえ」

「裏法律第二十三条……表の人間への不当な接触を禁ずる。くたばりなさい、違反者ども」

冷たく、低い声でそれだけ言って、緋菜は睨んだ。工場の跡地のような広い空間に、うじゃうじゃと屯する柄の悪そうな男たち。緋菜の言葉に表情を歪めた。彼女はそれを見逃さず、やはり容赦はいらないと確信した。なんとなく、あの刀は今使いたくなかった。代わりに手に握ったのは薙刀。一掃するのには手頃だろう。

こちらの戦闘意思も十二分に伝わったところで、男たちは各々雄叫びをあげながら向かってくる。今度は金属バットや特殊警棒のような生優しいものじゃない。おおかた全員が刃物を所持している。だがもちろん臆することはない。薙ぎ払う、薙ぎ払う、くるくると回って、また薙ぎ払う。踊るようにステップを踏み、刺し、斬り、払う。この男たちが元々弱いせいもあるが、やはり少し前に大きな存在と剣を交えたせいだろう。負けるどころか、傷一つ受ける気がしない。

「よい夢を」

冷やかな笑みを浮かべ、最後の一人を気絶させた。文字通り、全滅。薙刀を無に帰すと、緋菜は振り返ることなく自分を待つ翔梧のもとへと戻った。

この車は、無駄に性能が良い。走行音すらほとんどしない。そういうわけで、誰も一言も話さない車内はひどく重苦しい静けさに包まれていた。運転手の顔はもちろんだが、助手席の色葉の顔もよく見えない。スイは相変わらず窓の外を見ている。こうなると、この空気をつらいと感じているのは自分だけな気がしてくる。

まずはスイを自宅に送ろうとしているのだが、結局自分は何しに来たんだろう、と篝は少し省みてみたが、スイを連れて走り回った記憶だけが鮮明だった。お荷物にこそならなかったと思うが、なんだか腑に落ちないまま事件は解決したことになっている。深いため息を一つついた。

「……………なあ、篝はさ……………両親と仲良いのか？」
 「へ……………？ 両親、ですか……………もうずっと前から海外にいるんで、
 わかんないですね」

顔はまだ背けたまま、スイはようやく口を開いた。聞かれたのは両親の話だが、本当にいつから海外にいるんだろう。もう顔もぼやけてちゃんと思いつくことが出来ない。寂しいなんて思ったことがないのが自分でも不思議だ。

「そっか。あたしな、母親のことは大好きだったんだ。優しくてあたしをすっごく大事にしてくれて。けど父親には……………昔から反抗的だったんだよな」

ぼつり、昔の思い出を拾い集めるように、スイは少しずつ話しはじめた。もちろん篝も気になってはいたが、ずけずけと聞いていいことではないとわかっていたから。彼女はその気持ちを汲んだのだ

ろうか。

「けど母親はあたしが高三のときに事故で死んじゃって。ショックで大学受験も辞めて、働きもしないで無気力のまま今生きてんの。父親には相変わらず接し方がわかんなくて……なんでかわかんねえけど、あの時は母親が死んだのも父親のせいにしてたな。そのくせ父親の仕送りで生活して、しょーもないことで人生潰してクズに成り下がったわけだ」

ひどく自嘲じみた言い方だった。篤は黙って聞いていた。そうするのが正しいと思ったからでもあり、また何も言えなかったからでもある。スイは言葉を続ける。

「父親はそれでもあたしを見捨てないから、ますますどうしたらいいかわかんなくて……自覚はしてるけど、あたしなんかいつまでも意地張ってるバカな子供なんだよな」

言い終えて、スイがこちらに向き直った。表情に変化はない。多分至っていつも通りの、初めて会ったときと同じ彼女だ。だがその目は心なしか潤んでいるように見えた。走っていた車がゆっくり速度を落とし、止まる。今度は篤が口を開いた。

「……スイさんの気持ち、俺じゃなくてお父さんに言ってあげてください。とことん成り下がったんなら、今度は上がっていけばいい……って俺は思いますから」

「……お前はあたしみたいなクズにはなるんじゃないぞ。ありがとうな、緋菜によろしく」

目を細めてスイは笑った。いつの間にかスイの自宅マンションに着いていた。色葉と川嶋にお礼を言って車を降りた。見えなくなる

まで、その世界を見送った。そういえば、彼女の笑顔を見るのは初めてだった。車は再び動き出す。ひどく長く感じた一日だった。

「ふふ、お疲れさんでした。さて篝はん、明日はテストやねえ」

「……それ言わないでくださいよおおお!!」
いろいろな意味で、現実と日常へと戻ってきたのだった。

赤い雫が一つ、また一つ、床に零れ落ちる。ソファに腰掛けたまま、じっとそれを見ていた。ふいに規則的なそれは途切れた。

「ねえ、ネレイさ……先生は俺の邪魔をするのが好きなの？」

「あら、邪魔だなんて人聞きの悪い。今日は何もしなくて良かったんですよ。下手に傷でもつけられたほうが迷惑ですわ」

傷口に包帯が巻かれる。すぐに暗い赤色が染み出した。思ったよりは深かったが、この程度の傷は三つ首の番犬にとっては心地好い痛みに過ぎなかった。

「……黒猫のこと、知ってたんだね。俺は先生が二階堂グループと“黒”の仲介をした、としか聞いてなかったけど？」

「教えなくても、貴方なら見つけ出すってわかってましたの。強い相手を探すの、お好きでしょう？」

薄い桃色にウェーブのかかったセミロングの髪。白衣に身を包んだその女は、彼に一瞥もくれることなくてきぱきと処置を済ませる。彼女は、自分のことを怖いくらいに理解している。自分の性格も、そこから起こる行動も、さらにはそれによって生じる周囲の状況まで予測してみせる。彼女からは本当に仲介の件とその内容しか聞い

ていなかった。黒猫を探しに行くことも、そして自分が先程までしていた行動までわかっているのだろう。

「はい、終わりましたわよ。やはり貴方は優秀だわ、三つ首」

満足そうになつこりと笑い、彼女の右手がするりと頬を撫でた。

三つ首は、この女　ネレイ・ルルジアに命を救われた過去を持つ。瀕死の彼を救い、新たな人生を与えたのだ。彼女がいなければ今の自分はいない、その事実をよく理解し、感謝している。

だから三つ首は、彼女に従う。自分は彼女に忠実なただの犬でいい、そう思ってさえいるのだ。彼女の右手を取り、その手の甲にそっと口づけを落とす。敬服の意を込めて。

12、父と娘（後書き）

遅くなってしまうし申し訳ありません…！

事後処理はともかく、これにて二ト編終了です。

次回は緋菜とその仲間たちにスポットを当ててみます。

三作目を企画中につき、更新停滞の可能性もr y

13、黒猫と愉快的仲間たち

六条緋菜、十五歳。性別は女。血液型はB型。十月十八日生まれ。すらつと細い体型に高めの身長、整っている歳の割に大人びた顔立ち。くせのないまつすくな黒髪は背中を中心辺りまで長く伸びている。表側では茜崎高校の一年生でありながら、裏側では組織“黒”の幹部の一人である。

彼女は生まれた時から能力を保持していた。具体的な内容は明らかになつていなかったものの、それが理由で親に暗い路地裏に捨てられた。だがそこを運良く、本当に運良く“黒”のボスに拾われたのだ。緋菜は自分にとって親と同然のボスのもとで育てられ、次第に組織の一員として戦うようになった。長い間組織内で三番目の実力だったのだが、数年前にボスに次ぐ二番目になった。

そんな昔の、懐かしい夢を見ていた。何故今になつて思い出すように見たのかわからない。自宅のベッドで目を覚ました緋菜だが、まるで夢を忘れないように、余韻に浸るかのように動かないでいた。今はいない仲間も夢には出て来た。裏側の基本、殺し合いはまるで無かった。みんなで楽しく団欒している、ただそれだけの夢。

今日、まだテストだっけ。

伸びをしながら思い出す。ついこの間まで一風変わった仕事をしていたから、今日で一週間になる。中間テスト最終日、科目は現代文と化学。成績優秀な緋菜には何ら問題のないことはあるが、彼女の脳裏に二人ほど今日のテストに頭を抱えているであろう人物が過ぎた。だが今更してやれることもない。ベッドから出て支度を始めた。

緋菜の自宅は学校まで徒歩で二十分近くかかる。組織から直接通うこともあるが、なるべく自宅で生活することを心がけている。ほつたらかしのすれば埃まみれになってしまう。この日も余裕を持って家を出て、いつもの通学路を歩いて行った。

「ろつくじょーさん、おはよ」

「おはよ……なんだ、倉科じゃない」

後ろから声をかけられて、反射的に挨拶を交わした。振り向いた先にいたのは、倉科篤。少し前に隣の席になってからやや話すようにはなっていたが、つい最近妙な関係が出来てしまった。なんだってなんだよ、と不服そうに言いながら緋菜の隣を歩く。彼は今日のテストの話に始まり、他愛のない日常会話を交わしていた。

「あ、そういえばさ。昨日コンビニでスイさん見たんだよ」

「へえ……外出るんだあの人」

「しかもさ！ 何してんのかなーって思ったらさ、無料の求人広告取って帰ったんだよ」

「え ついに脱二トの時、ってこと……？」

篤もよほど驚いたのだろう、どこか興奮気味である。緋菜も口ぶりこそいつも通りだが、内心かなり驚いていた。なんせスイは一日をネットゲームで潰し、親の金で生活する毎日を送る人物だ。にわかには信じがたいが、一週間前の彼女に関わる仕事を通じて、スイの中にも何か変化があったのかもしれない。前線で戦っていた緋菜にはよくわからないが。

その後も他愛のない話は続いた。不思議と話題が尽きることはない、基本的に話題を持ち掛けてくるのはいつも篤だ。校門をくぐった先、まだ数もまばらな生徒たちの中から、こちらに向かって手を

振る人物を見つけた。黒髪に黒縁メガネが特徴の男子生徒。二人のクラスメイトであり、篝が普段から行動を共にしている伊宮アキラだ。

「篝、今日は早えーじゃん！　そしておはよう、マイハニー緋菜ちゃー」

響く破裂音。アキラの愛を込めた挨拶が終わる前に、彼の左頬に清々しいほどの平手打ちがヒットした。だが大きく左へ傾いたがころうじて倒れずに済んだ。隣にいた篝は、あんぐりと口を開けてその始終を見ていた。緋菜自身驚いていた、体が反射的に動いたのだから。篝とふいに目が合ってしまった。

「……なんかハエがうるさかったから」

「やる気のねー言い訳だなオイ」

しれっと適当に言い訳らしからぬ言い訳をして、緋菜は二人を残しさつさと教室へ向かった。篝は一度置いていこうかとも考えたが、仕方なくアキラに大丈夫か、と声をかけた。

「さすが美人の平手打ちは強烈だな……まあ逆に燃えるってもんだろ。高い山ほど登りがいがあるんだよ、なあ？」

「諦める、多分頂上は宇宙にあるから」

真っ赤になった左頬は気にも留めず、長い黒髪を揺らして歩く緋菜の後ろ姿を見つめていた。アキラは入学して一週間後ぐらいに、緋菜に一度告白したらしい。だが、汚いものでも見るような目で黙殺されたとのこと。それで降も今日のようにちよくちよくアピールしてはいるがすべてあの調子だ。

だがアキラが美人好きで他にも彼女候補がいるという事実を篝は

知っていた。要は女たらしだ。アキラ自身は見た目も格好良く男女ともに評判が良いのに、なんとも勿体ないことだと篤は常日頃思っていた。

* *

終わりを告げるチャイムが鳴り響く。一斉に回収される解答用紙。すかさず出来栄えについて一喜一憂する生徒の声で教室は騒がしくなる。終わりの会なるホームルームはないため、淡々と帰る支度をして緋菜は教室を出た。

「あれーっ、緋菜、もう帰っちゃうの？」

「今日はちよつと用事あるから。また明日ね」

「そっかー、ばいばーい！」

足早に帰宅しようとする彼女の姿はやはり少し目立ったらしく、女子生徒が数人声をかけてきた。軽く手を振り返し今度こそ教室をあとにする。残った生徒たちはテスト終わりということでカラオケやら何やら遊ぶ予定を立てていた。かもめの姿もその中であつた。

緋菜の用事。詳細を聞くのはこれからののだが、裏側での仕事の話だ。来れる仲間には皆来るよう言われている。人気のない細い路地裏へと進む。しばらく右折や左折を繰り返した先、適当なコンクリートの壁の前で緋菜は立ち止まる。その壁に指先で“H I N A R O K U J O”となぞると、そこに白く光る文字となって現れた。書き終わると文字はすっと消えていった。軽く壁を押せば、代わりにドアが現れる。この中を通って行けば組織の談話室へと一直線なのだ。一度篤を連れて来たこともあつた。

「いいですか！？ 私がネットゲバっかしてると思ったら大間違いで

す！ 日々皆さんのために情報収集してるんですよ！

「嘘つけお前ネットゲカ乙女ゲーしかやってねーだろ！ 二次元なんざに恋してどーすんだよ！」

「もっつ、二次元の良さがわからないなんて！ 翔梧さん人生の八割損してますよ！」

「んなわけあるか！ お前こそ現実見ろつての！」

談話室に続くドアを開けた先、いきなり耳に入ってきたのは罵り合い、目に入ったのはパソコンの目の前で騒ぐ二人。翔梧と、赤いメガネをかけた茶髪のショートヘアの少女、律香。彼女は先程自称していた通り情報処理、収集を得意とはしているが、どうにもネットゲームや画面の向こうの恋人と愛を育むことに精を出している場合が多い。

「あれ、おかえり緋菜。テストお疲れ様」

「ただいま。あの二人また喧嘩してるのねー」

「ねー、仲良しだよねー」

備え付けの台所からひよこつと顔を出した男性、悠斗だ。焦げ茶色のくせ毛といつもこにこ笑っているのが特徴の彼。動物に例えたら間違いない羊だ。現役大学生で料理が得意、そして誰も彼が怒ったところを見たことがない。紅茶でも飲むかと聞いてきた悠斗に頷くと、翔梧たちは放っておいてソファに座ろうとした。その時、ドアが勢い良く開かれる音と共に隣の部屋から猛スピードで何かが駆け込み 緋菜に抱き着いた。

「ひーちゃんっ」

「千佳、びっくりした……」

腰のあたりに手を回し、きらきらと目を輝かせて笑う。わずか九

歳の少女、千佳。彼女が駆け込んできたドアの付近にうさぎのぬいぐるみが置き忘れられている。彼女のお気に入りのぬいぐるみなのだが、抱き着くときに手を離れたのだろう。

基本は肌身離さず持っているぬいぐるみがこの有様だ。千佳は緋菜のことが誰よりも何よりも大好きだ。彼女が居ればぬいぐるみなんて空気同然。緋菜に手を引かれ彼女の横にちよこんと座った。目の前に置かれた紅茶を一口飲んだところで、隣のドアが再び開く。

「……お、結構いるぞ。もういいんじゃないか？」

「そうやねえ……緋菜はんや翔梧はんもおるし、始めましょか」

ぬいぐるみを拾いながら入ってきた川嶋と色葉。川嶋がそれを千佳に手渡し、ぶすつとした表情で受け取った。どうやら早速本題に入るということらしく、まだ揉めていた翔梧と律香や台所にいた悠斗もソファに座る。色葉たちが腰を落ち着けたところで、一瞬にして先程までの和やかな雰囲気は無くなった。

「詳しくはさつきボスに聞いて来たんやけどねえ、今回は人数多めに動員しはるて。三つ首の一件もあるからねえ」

通常、引き受けた仕事は一人から三人程度でこなすものだ。もともと人数がさほど多くない組織なのだが、高い能力を持った人材も多いので問題はない。だが今回はそうもいかないようだ。手のかかりそうな仕事なのだろう、そして尚且つ“三つ首の番犬”^{ケルベロス}への警戒でもある。スイの一件のとき緋菜が遭遇した、正体も目的もよくわからない相手だった。

「場所は廃墟になった建物……ちゃんと案内すつから説明は省くぞ。そこに住み着いた化け物を倒してくれつてさ。能力落ちなのかただの気違いなのかはわからねえ。なんせ生き残った人間が居ないんだ

「からな」

全員、神妙な面持ちで話を聞いていた。すでに死者が出ている上に、妙に情報が少ない。ここにいる全員が優秀な能力を持つてはいるが、戦闘力には事欠く者もいる。川嶋は全員の顔を見渡して、しばらくしてから再び口を開いた。

「行くか行かないかは自分で決める。いつも通り、ボスも強制はしないってよ」

「……あたしは行く。そのために来たんだから」

少し冷めてしまった紅茶を飲み干して、緋菜は告げる。臆した様子はまったくくない。組織の目的、それは主に表の人間を守ること。今回はそれに直接関わりはないかもしれない。だが、緋菜の目的には一致していた。

裏側の世界を、非道な殺戮が合法とされた世界を変える。緋菜が長年夢見た世界。表側のように、安心して暮らせる世界が欲しい。力がすべてのこの世界、目的を果たすためには頂上を目指す必要がある。だから強くなりたい。夢見た世界の実現への一歩として、この力で救いをもたらす。

「出発は深夜零時、来る奴は準備してここに集まること。ま、なるべく気楽に行こうぜ」

もともと今答えを求めてはいないのだろう、川嶋はそう言うてすぐ談話室をあとにした。それぞれが思い思いに動き出す。あくまで予想だが、おそらく七人全員が集まる。千佳のような子供を連れて行くのは少し気が引けるが、彼女も立派な戦闘員だ。信頼するボスが引き受け、それを自分たちに任せようと言うのだから、きつとその期待に応えようとするだろう。

緋菜は組織内の自室へと向かい、仮眠を取ろうとベッドに横になる。ふと、三つ首の言った言葉が頭に浮かんだ。あれから何度考えてもわからなかった意味を再び考えていた。目を閉じ、眠りにつくまで。

“ 近いうちに、迎えに行くから ”

13、黒猫と愉快的仲間たち（後書き）

秀困気が終わりっぽいけど少し続きますよ！

14、黒猫と摩訶不思議なお仕事

「……………ひーちゃん、起きて」

体を軽く揺さぶられて目を覚ます。その呼び方から確認せずとも千佳だとわかる。もしかして寝坊したのか　そう思って飛び起きるが、時刻は十一時四十分。まだ少し余裕があった。ひとまず安心して、千佳に優しく微笑みかけた。

「わざわざ起こしに来てくれたの？　ありがと、千佳」

「うん、だってひーちゃん、おしごと行くんでしょ？　千佳も行く」

そう言っつて千佳は嬉しそうに笑った。正直緋菜としては彼女を仕事に同行させるのは気が引けるが、行くと言っつたら聞かないのだ。彼女の笑顔に、緋菜はただ笑っつてみせた。

ベッドから降りると、軽く身支度を始めた。何も言わずとも、千佳は近くにあった椅子に腰掛け緋菜を待つ。その間、肩から提げたシオルダーバッグの中身を確認していたようだ。緋菜はなるべく手短に済ませると、千佳の小さな手を握っつて部屋を出た。

「お、緋菜と千佳も来たか。じゃ、全員揃っつたな」

談話室に再び全員が集まっつていた。予想通り、みんな集まっつた。悠斗と色葉は談笑していた。律香と翔梧はいかにも寝起きの顔で、まだ眠たそうだ。川嶋を先頭に車のもとへ向かう。この人数ならぎりぎり乗れる。

「なーあー、いっつも思っつてんだけど、何で俺律香の隣なんだよ？」

「私も不満ですー！　悠斗さん代わっつてくださいよっ！」

「あーうるさいうるさい！ 緋菜と千佳の隣にいて良いのは悠斗だけだ！」

「なんだかんだ仲ええくせに、何の文句があるんどすか」

呆れたような色葉の発言に二人とも過剰に噛み付いた。喧嘩するほど仲が良いのだろう、きつと。運転席に川嶋、助手席に色葉、真ん中の三人掛けの席に左から千佳、緋菜、悠斗が座っている。その後ろで翔梧と律香が騒いでいるのだ。人見知りというレベルを遥かに超越し、千佳は緋菜以外に懐いたことはない。千佳を置いて緋菜が翔梧や律香と話そうものなら、彼女はたちまち不機嫌になる。さすがに優しい悠斗に敵意を見せることはないため、この構図があまりとなっっているのだ。

「つたく……緊張感がかけらもねえな」

「求めるほうが無理なんじゃないかなあ」

ため息をつく川嶋と、いつも通りニコニコと笑う悠斗。彼もまた、緊張感などかけらもない。これが普段と変わらないということは川嶋もよくわかっていたため、もう何も言うまいと車を走らせた。

「……ここ、なの？」

「ホラー臭ぶんぶんしてますけど大丈夫ですか……？」

案外早く着いたのだが、車を降りてすぐ目に入ったのは古い屋敷。いかにもお化け屋敷と呼ぶに相応しい。深夜の暗さや空気の冷たさ、そして静けさが相まって不気味さを際立たせている。

「送られてきた地図が間違ってたなきゃここだ。しっかし……むやみに突っ込むのは止めたほうが良いな」

廃墟と言っていたくらいだから、おそらく今は誰も使っていない。しかし門は誘うように開いたまま、時折風に揺れて錆び付いた音を立てる。だがあの門をくぐって帰ってきた者はいないのだ。川嶋の言う通り、考えなしに突っ込めば即死かもしれない。緋菜はある提案を口にした。

「最初に、あたしと翔梧が屋敷に入る。ちょっと状況を確認して大丈夫なら次に律香や色葉たちが入る。それでどう？」

「確かに緋菜はんと翔梧はんならだいたいどんな罠でも耐えられるからねえ……翔梧はんは？」

「俺はいーよ。二人いりゃなんとかなるだろ」

「敵の正体がわかってないし、本当に危なかったら逃げてね。ドアを叩いてくれたらすぐ行くから」

特に異論はなく、提案通り緋菜と翔梧がまず屋敷に入ることになった。不安げに緋菜の手を握った千佳に、緋菜は「大丈夫」と頭を撫でた。実際大丈夫と言いつれはしないのだが。川嶋たちは入口のドアの前で二人が戻るのを待つ。

「……どう、何か見える？」

「んー……目立ったものはねーな。先に入ってた奴も入口でくたばったわけじゃねーのかな」

門と同じ、錆び付いた少し耳障りな音をたててゆっくりドアは閉まる。電気はついておらず、多少暗闇に慣れているとはいえ緋菜には何も見えなかった。そこで、翔梧の力が役に立つ。彼は人間であ

りながら、その体に人間離れした様々な身体能力を秘めている。今ならばその目だ。犬や狼のような広い視野と暗闇でもよく見える目を一時的に作り出している。彼自身はつきりと数は把握はしていないが、彼は様々な動物の身体能力を借りることが出来る。緋菜も少し慣れはじめた目で辺りを伺うが、何も見当たらなければ何の気配もしない。

「……何もねーことないか。ちょっとだけ、血の匂いがする」
「それくらいかしら……一回戻ってから、他の部屋も見てみましょう」

そう言って一度ドアのそばまで引き返す。ドアノブに手を掛けようとした。その瞬間、突然部屋に光が満ちた。驚き振り返れば、大きな正方形の部屋の壁に四カ所、燭台があつたらしく明かりが灯っている。もちろん、緋菜も翔梧も一切触れていない。確かに今、自分たち以外の何かがここにいたのだ。緋菜は右手に刀を握る。やはり気配はなく、明るくなったが部屋には誰もいない。下手に扉は開けられない。

辺りを警戒していた翔梧が、ゆっくりと部屋の真ん中に向かって歩き出した。止まっただけでもらちが明かないと判断したのか、緋菜は咎めようと開いた口を何も言わずに閉じた。部屋のちょうど真ん中に来た瞬間、何かは再び動き出した。

「翔梧、危な　ッ」

たくさんのガラスが一度に割れた、そう思わせるような轟音。突如、翔梧の真上にあったシャンデリアが落下した。咄嗟に声を張り上げたが、緋菜の言葉は途中で切れた。一瞬だけ、気配を感じたのだ。何か殴り掛かってきた。風を切る音。緋菜は横に飛びのいた。だが再び気配はなくなった。

「緋菜、大丈夫か!？」

「…………平気。それより、どうする?」

「姿が見えねえんじやな…………對抗出来るのは、テツさんか悠斗か?」
「可能性があるとしたらそれくらいね」

上へと続く階段の手すりに翔梧は避難していたらしい。緋菜のもとに降り立つと、警戒は解かないまま對抗策を考える。翔梧はずつと匂いや音も力を使って探っていたのだが、いっこうに掴めやしな。守るように翔梧が立ち塞がる後ろで緋菜はドアのそばまで戻り、力一杯叩いた。即座にそばを離れる、と同時にドアは勢い良く開いた。

「おい、大丈夫か!？」

「えらい遅いから心配したんよ…………で、状況は?」

「姿は見えないけど、何かがいる。まるで幽霊みたいね…………」

まず入ってきたのは川嶋、続いて色葉、律香たち。軽く説明しながら、粉々に砕けたシャンデリアを指差す。空気が張り詰める。少しずつ、気配を探りながら動き出す。いっどこから襲い掛かってくるかわからない、それがネックだ。

「やれることはやってみつか…………悠斗」

「うん、テツさんもね」

川嶋は両手に銀色の銃を握っている。言い終わるや否や、一つ深呼吸を置き、小さく何かを呟いき引き金を引いた。下手な鉄砲数打ちや当たる。そう言わんばかりに、部屋の至るところに乱射した。壁に当たっては弾ける、黒いペイント弾だ。彼は今、黒いペイント弾を脳内に描き、二つの銃はそれに応えたのだ。

緋菜たちが身を潜めて見守る中、悠斗も動く。右手の親指を軽く

噛み、血の雫を一滴地面に落とすと白い光が彼を包む。そして名を呼んだ。光の中から美しい純白の毛並みを持った獣。レグルスと名を付けた、彼の使者が姿を現す。悠斗はその頭を撫でると、行け、と一言だけ告げた。

やはり正しい人選だった。二人にかかればあつという間だ。黒いペイント弾は時折空中で弾ける。例の何かにぶつかった証拠だ。レグルスは空中で獲物に噛み付く。響く悲鳴。そこに何かがある証拠だ。

耐え切れなくなったのか、ついに正体を現した。そこにいたのは、まさに絵に描いたような“お化け”。継ぎ接ぎの白い布を被った何か。目が一つのものや三つものもの。数は多い。しかし黒色に染められたり噛み付かれて逃げ惑う様子に恐怖は感じない、それにまるで子供の落書きのような可愛さがあった。

「……こりゃ、形成逆転だな」

「ふふ……暴れまくれという神のお告げですね！」

にやりと笑う翔梧と律香。この二人、やや好戦的などころは一緒だ。ため息をついた緋菜のもとに千佳が走り寄ってくる。きゅっと口を固く結んでこちらを見てくる。それは「千佳も戦う」というサインなのだ。緋菜はわかっていた。微笑み、頷いてみせる。

「……ま、とりあえず全滅させましょっか」

握った刀の銀色に反射して、静かに燃える火が煌めいた。

15、黒猫と型破りなターゲット

白く細い腕に抱かれた、茶色のクマのぬいぐるみ。千佳はそれに軽く口づける。それは命を吹き込む行為。千佳が手を離せば、ぬいぐるみは地面に自由落下し 着地した。

「……おつきいクマさん、お願い」

指差し指示した千佳の声に応え、クマのぬいぐるみはみるみる巨大化していき、結果二メートルほどの生き物が誕生した。クマは雄叫びをあげながら“お化け”たちに向かっていく。攻撃は単純明快、殴る蹴るの暴行だが。

「……相変わらず悪趣味だよなあ、お前……」

「どこまでも趣味が合いませんねえ翔梧さん。ま、どうでもいいです。この私、組織“黒”のポイズニックガールこと副島律香がお相手致します！」

「テンション高えよ……」

ため息をつき苦笑いを浮かべる翔梧を気に留めず、律香は声高らかに宣戦布告。吊り上がったままの口角とぎらぎらと輝く瞳。そんな彼女を取り巻くように、足元の地面がまがましい色合いの腐海へと変わる。律香は毒の使い手だ。足元を中心に展開した陣から自らの想像力に任せて戦うのだが、素材が素材なために見栄えだけが欠点だ。

毒の陣から生まれ出る蝙蝠のような生き物たちが、お化けに群れで向かって行く。律香本人は毒をたっぷり仕込んだナイフを投げる。仲間には当てない、そのコントロール性は抜群だ。

「……色葉は戦わないの？」

「せやなあ……あのお化けたち、感情とかあらへんかもしれへんし。緋菜はんは？」

「参加するつもりだったけど、一応人手は足りてるしね……っと」

部屋の隅で仲間たちの戦いを傍観する色葉と緋菜。尋ねて返ってきた答えに納得すると、向かってきたお化けを刀で切り捨てる。仲間の取りこぼしだろう。色葉の能力だが、彼女は力の媒体として蝶を操る。その蝶に触れたものに幻を見せ精神を攻撃するのが主流なのだが、生憎感情が存在しないような無機質なものには効き目がない。

力尽きたらしいお化けは次々に金切り声をあげて消滅していく。圧倒的優勢、全滅するのも時間の問題か。そう思われた頃。この部屋にある他の部屋へと続く五つのドアが勢い良く音を立てて開いた。何事かと全員が音にした方々へと目を向ける。やって来たのは青白く悲壮感に満ちた顔で重そうな体を引きずって歩く人型の何か。簡単に言えば、ゾンビのような。

「……まさか本物のお化け屋敷だとはな」

「わー、顔色悪いねー」

思わず手を止めて顔を引き攣らせる川嶋と、相も変わらずニコニコと笑っている悠斗。川嶋は軽く舌打ちすると、再び銃を構え今度はゾンビらしきものに向けて火の玉を撃ち込む。川嶋もまた想像力に頼る能力ではあるのだが、彼の場合色の制約がある。例えば今なら赤色で連想するもの。火の玉を生み出したわけだ。はつきりと連想出来なければ具現化出来ない、それが抜群の銃の腕を持つ彼をBランク能力者に留めている理由だ。

「っーかよ……っ、キリなくね!？」

「諸悪の根源を叩かなきゃ終わらないんですかね……っ」

やや仲間たちにも疲労の色が見えはじめた。決して相手は強くない。だが、多勢に無勢。倒しても次から次へと押し寄せてくる。ついに緋菜や色葉も参戦したが、事態は一向に良くならない。

だが、そこで悠斗が何かに反応し息を呑んだ。厳密に言えば反応したのはレグルスなのだろうが、今の彼らはほとんどの感覚を共有している。レグルスの感じ取ったものが、そのまま悠斗にも伝わる。

「……駄目だレグルス！」

「っひゃあああああああ！！」

悠斗が突然そう叫んだ。と、ほぼ同時に少女の叫び声が部屋に響き渡る。お化けとゾンビの動きが止まる。全員が呆然と立ち尽くした。緋菜がレグルスのもとへ駆け寄った。階段を上がったその廊下の、小さな棚の後ろ。荒々しく退けられた棚の向こうの壁に小さな穴が空いていた。そこで見たものは、よく似た見た目の双子らしき子供。

「……緋菜はん、悠斗はん、何事ですか」

「……子供がいる」

「男の子と女の子の双子だね……迷子かな？」

「だああああれが迷子だああっ！！ ナメてんのか！！」

突如そう叫んだのは少女のほう、少年のほうはと言えばだるそうにため息をついている。二人は手を繋いで穴から出て来た。逃げられることを警戒してかレグルスが吠えると、少女は身を縮こませて一瞬怯えた表情になった。

「あなたたち、ここで何してるの？」

「決まってるんだろ？ あたしら最近ここに来たばっかだし、ちょっとこいらの能力者どもを試させてもらったんだ。けど骨がない奴らばっかだし……でも、あんた達は違ってたな」

「……おいおい、まさかこのゾンビとか全部お前らの仕業か！？」
「そーだぞ！ ふふん、すごいだろ！」

驚きのあまりそう尋ねた翔梧に少女は誇らしげな顔をした。少年は相変わらず興味のかけらもなさそうな表情だが。この双子は小学生か中学生か、見た目で考えるとそんな微妙なラインにいる。少女は毛先の跳ねた黒髪のショートヘアと鼻の頭の絆創膏が目についた。一見すると少年に見えなくもない、活発そうな少女。対して少年は無造作な黒髪に眠そうな目をしており、無気力さが滲み出ている。

「……ねー、リコ。気が済んだなら帰ろうよー……」

「えー！？ なんでだよ！ リトは帰ってゲームしたいだけじゃん！」

「僕らに勝てる人見つけたら帰る約束は……？ もう負けたようなもんでしょ？」

「うっ……なんで覚えててんだよう……」

リコ、リトと言っらしい双子。何やら口論を繰り広げていたが結論が出たらしく緋菜に向き直る。それから、二人は繋いでいた手を離した。その瞬間、お化けは完全に消滅した。ゾンビはといえば、なんとみるみるうちに元々の人間の姿へと戻っていき、意識を失い地面に倒れた。

「こいつら、あんたたちの前に挑んできた奴らだよ。あたしたちの能力でちよつと体借りただけ」

「じゃあ、死んでないんですね……！」

「つまり、これだけ負けたってことかよ……」

悠斗が倒れた元ゾンビ数人の脈を確かめる。問題なかったらしく、苦笑いしてつぶやいた川嶋に微笑んで頷きあっている。これにて一件落着か。そう緋菜が思った矢先、彼らは動いた。手を繋ぎ直すと、二人はそれぞれもう片方の手を天井にかざした。すると再び数体あの白いお化けが現れ、天井を突き破った。

「ちよっ……どこ行くのよ!？」

「我ら鮫島姉弟、今日はひとまず退散! また遊ばーな!」

「姉弟っていうか、双子だけだ」

お化けに手を引かれ天井から脱出を試みる双子。捨て台詞らしきものを置いていったリコにリトのささやかな反論が聞こえた。そうして彼らはあるという間にこの場を去った。残された戦いのあとの壊れた廃墟は、ここに入る前と同じような静けさを取り戻した。

「……これって、任務成功なのかな?」

「あーもーわかんね。ちつともさっぱりわかんねー」

やや仲間たちの中に混乱を残してしまったようだが、ひとまず仕事は終わった。報告諸々が面倒な気しかなかった。緋菜はふと思っただ、そういえばこの仕事、依頼主は誰なのかと。色葉に尋ねようとしたが、部屋に響き渡った拍手の音がそれを遮った。

「ブラボー! いやー、さすがは精鋭揃いの組織“黒”よねーん。

やっばあなたたちに頼んで正解だったわー!」

いつからそこにいたのか。そんなことは想像もつかない。ただ、彼女はそこにいた。二階にいた彼女は階段を降りながら間延びした

口調で何か話している。ゆるくカールした明るい茶髪が揺れる。突然の乱入者に驚きながらも警戒心をあらわにする仲間たちに、深緑の瞳を持つ彼女は不敵な笑みを浮かべた。

「そんな警戒しないでよーう、私が今回の依頼主よー？ ボスさんには黙っておいたんだけど、それは許してねーん。依頼主改め、箱庭の空間の番人兼顔役、叶天音でーす」

裏側を統率する箱庭の使者は、そう言って無邪気に笑いかけた。

16、黒猫と歪み合う運命

「はっ、箱庭、の……！？」

「おいおい、俺らが何したって言うんだよ……！」

怯えの色を顔に出す律香。翔梧もさらに警戒を強めて身構えた。箱庭、紛れも無く裏側の統率者たちの組織。全員がSランク能力者である彼らは、めったに人前に姿を現さない。彼らは基本的に法を犯した者として接触せず、どこかの誰かと手を組むこともしない完全に独立した組織だ。だから、箱庭の一人が自分たちの目の前に現れたことはアブノーマルな事態なのだ。

「ねーえ、話聞いてたー？ 私は依頼主なのー、あなたたちに危害を加えるつもりは一切ないのー！」

「……ならどうしてここに？ 何用ですか」

少し頬を膨らませて弁解を試みる天音に、緋菜はいたって冷静なまま尋ねた。天音は緋菜の姿を品定めでもするかのようにじっくり見回すと、につこりと笑みを浮かべた。

「よくぞ聞いてくれましたー！ 今日君たちの功績を讃えて、少し私たちのことについてお話しにきたのよーっ」

「……それが報酬のつもりか？ 箱庭の話がどんな得になるのか俺にやわかんねえが」

「こんなこと話すの、君たち“黒”が初めてなのよー？ 誰も知らない、箱庭の実態について少し、ね」

やや挑発的に、敵意とも取れる態度で川嶋が言い放つ。だが天音はさほど気に留める様子はなく、意味深に妖しく笑ってみせた。箱

庭の実態。実際、その言葉には誰もが興味を引かれた。箱庭についてわかってしていることは、メンバー構成が数人であり全員がSランク能力者であることぐらいだ。

「何でそれをうちらに話しはるんですか？ 意図が読めまへんなあ」
「君たちなんか冷たいねえー、もしかして私たち嫌われてるー？
目的もちゃんと話すからさ、まずは聞いてよーう」

やれやれ、と天音は首を振った。やはりさほど気にした様子はないが。それから彼女は階段途中でその場に腰を下ろした。妙な笑顔を浮かべたまま、仲間たちひとりひとりをじっくりと見回す。先程緋菜にそうしたように。

「そうだねー、まずは私たちの成り立ちから話そつかー。元々この生きることも許されない裏側をなんとかしようって人がいてさ、その彼が集めた同志たちの組織なの。最初は五人でやってたんだけど、訳あってずっと前に一人抜けちゃってから四人でやってたの。でね、最近……二、三ヶ月前かな。今度は創立者の彼が抜けちゃった」

話を進めていくごとに、彼女の表情からだんだん、少しずつだが笑顔が消えていくのがわかった。口調も初めのような陽気なものじゃなくなっている。しかし、何故こんな話をするのか。

「最初に抜けた人は今でも元気にやってる、君たちも会ったことあるかもね。ただ、この前抜けた彼は……多分死んだ。情けない話だけど、私たちは奇襲に遭ったの」

驚きに目を見張った。抜けたメンバーの件もだが、何より一番、彼ら箱庭が奇襲に遭ったことだ。無謀にも程がある。たった一匹の蟻が像を倒そうと試みるようなものだ。だが、天音の言う“彼”と

奇襲に遭った話が結び付くのなら、像は倒されてしまったのではないか。

「上手いこと罠に嵌められてね、なんとか危機は逃れたんだけど……彼が犠牲になった。もし手がかりを見つけたら教えてほしいの。死んだって証拠を見つけないきゃ気が済まないのよね。黒髪に赤い目の、時を操る能力者。名前は凜々島ハルキ、私たちのリーダーだった」

つまり、彼女は生死不明のリーダー探しを手伝ってほしいということだ。意外や意外。拍子抜けしたと言うのは語弊があるかもしれないが、簡単に言えば人探しなのだ。一体どんな壮大な話を持ち掛けられるのかと思っていた、そのせいでもあるろう。

「君たちは強い。それに表と裏の両方に手を差し延べる姿勢、君たちなら話しても良いと思ったの。下手な野心家に教えたらここぞとばかりに潰しにかかってくるからねー。お礼は弾むし、無理して探さなくてもいい。ま、勝手ながら私たちの信用を裏切るような真似したら潰すけど」

つまり片手間にすればいいということだが、秘密を知った以上は何事もなく過ごすことは出来なさそうだ。容易に言い触らすのも好ましくないだろう。それほどまでに必要な存在なのだろうか、その男。

「彼がいないと箱庭が機能しないとか、そういうのじゃないんだけどね。問題は奇襲してきた相手なのよ。君たちさ、数年前に仲間を一人失ってるね？」

「……何で知ってたんだよ」

不審な目を向けて翔梧が言う。その話は仲間たちの中に大きな悲しみを生んだ、だから忘れるはずもない。しかしそういう話はおおっぴらにするものではない上、こんなところで持ち出されては疑問にも思う。

「箱庭は裏側の人間の生死は一人残らず把握してるの。彼強くて有名だったし。そのお仲間を殺した犯人……まだ見つかってないでしょ？」

「まさか、同一犯……とか」

「そのまさか。力に貪欲な奴は今度は箱庭のリーダーを狙ってきたのねー。結局行き着く先はそこなんだけど、要は情報提供し合おうってこと。言っておかないと君たち、殺しちゃうでしょ？」

律香の問い掛けに飄々と答える。緋菜は下唇を噛み締めた。視線は俯いて下に落としたまま、何も言わない。憎いのだ。思い出している憎悪の念がふつつつと蘇る。まだ生きているという事実は何よりも虫酸が走る。彼女の言う通り、もし奴を見つければ問答無用で殺すつもりだった。

「ほら、割と関係ある話になってきたでしょ？ 利害は一致するはずだけど、まあ、今後については好きにしてよーう。奴は多分また水面下で力を溜めてる。いつまた誰を狙うかわからないわー……今同じ地位にいる君が危ないかもね、黒猫」

それじゃ、と笑顔で手を振ったあと、天音は階段を上がった先の壁の中へ消えて行った。張り詰めていた空気が少しずつ緩み始める。しばしの沈黙のあと、初めに動き出したのは緋菜だった。

「……緋菜さん、」

「ひとまず、今日は帰りましょ。簡単に結論を出していい問題じゃ

ないわ」

遠慮がちに名前を呼んだ律香に淡々とそう返すと、まっすぐに屋敷の外へと向かう。千佳が、それから川嶋たちがそのあとを追う。律香と翔梧は一度顔を見合わせたが、お互い何も言わず仲間のあとを追った。

＊＊

「 緋菜、起きてるか？ 」

軽くノックしてドア越しに声をかけと、どうぞ、と返事があった。組織に戻ったあと、報告は川嶋と色葉に任せた。悠斗や律香が思い思いに動き出し、千佳を寝かしつけてから緋菜も部屋に戻った。そんな彼女を、翔梧は尋ねた。疲れているであろうことは承知だが、じっとしていらなかったのだ。

「 どうしたの、翔梧 」

「 わり、今日のこと。やっぱり黙ってらんなくてさ 」

「 ……そんなことだろうと思った 」

そう言っつて緋菜は少し笑みをこぼす。緋菜は翔梧をよく知っている。同じように、翔梧も緋菜をよく知っている。ベッドに腰掛ける彼女の隣に座ると、ちぐはぐな思いを話し始めた。

「 ……あいつが死んだ時のことは、昨日のことみたいに覚えてる 」

俯き、視線を落としたまま翔梧は呟く。緋菜は何も言わない。お

互い、嫌でも思い出さざるを得ないのだ。組織の仲間の、誰もが忘れられない傷を心に負った。特に緋菜とその人物との間には強い絆があった。

「どんな手を使っても、あの野郎は俺たち皆で倒す。だから緋菜、お前は」

「分かっている。もう大丈夫だから」

彼の言葉を遮って、緋菜ははつきりとそう言った。驚いて顔を上げてみれば、彼女はそこで迷い無く微笑んでいた。その表情には、自分が心配する必要など皆無だったのだと安心させる力があつた。つられて、翔梧も微笑んだ。

「意外と心配性よね、翔梧も」

「誰のせいだと思っただよ……」

「はいはい、ごめんって。今は守らなきゃいけないものがたくさんあるからね」

守らなければならぬもの。その存在が、緋菜を強くさせたのだ。今は亡き人が前線に立って守ってきたこの組織で、緋菜がその役割を担うことになった。そして立派にその役目を果たしている。この組織だけじゃない、他の裏側の人間も、ひいては表側の人間まで。用は済んだ。翔梧は緋菜が以前のように無茶しないように勧告しに来ただけだ。その心配は無用だった。立ち上がり、じゃあな、と声をかけ部屋をあとにする。

「……倉科篤、か」

部屋へと戻る途中、とある名前を呟いた。表側の、緋菜と同じ高校に通う人間。妙なトラブルに巻き込まれて裏側の事情を知ること

になった不幸者だ。彼もまた、緋菜の“守らなきゃいけないもの”
たちの中の一人だろう。

夜が明ける。裏側の世界はしばしの眠りにつく。大きな運命がす
でに動き始めたことを、まだ誰一人として知る者はいない。

16、黒猫と歪み合う運命（後書き）

緋菜サイドひとまず終了。

思った以上に早くから設定たちがぽんぽん表へ出てるんだが大丈夫か。

問題ないといいなハハッ

17、放課後の待ち伏せ

夢を、見ていた。またあの夢だ。深い深い水の中。海や湖かもしれないが。そこにただ立っている自分。見上げても、やはり水面は遠い。いつものように、真正面には鏡がある。しかし今日もその中に、自分はいない。

これは夢だ。夢の中にいながら意識のようなものを持ち、篝はこれが夢の中であることを自覚していた。夢よ覚めると言い聞かせてみるが、そう上手くはいかない。ただ茫然と、意味もなくそこに立ち尽くす。何となく、鏡に手を伸ばしてみた。

「……………せ……………り」

はっと息を呑む。掠れて何を言っているかはわからなかったが、確かに聞こえた。紛れも無い、何かの声を。そしてそれは、鏡の中から聞こえた。今までこんなことはなかった。突如訪れた変化。もう一度、今度こそしっかりと聞き取ろうとさらに手を伸ばした

「……………え！」

ゴン、となかなか派手な音を立てて額を打った。ベッドの縁、本来は寝相の悪さなどの原因で下へと転げ落ちる役割を持つ部分に、篝は思いつ切りぶつかった。そんなわけで、夢から覚めた。額をさすりながら、上体を起こした。

久しぶりに見たと思ったら。

わかりにくい進化を遂げたらしい夢。最近、と言っても数週間だ

が、その間は見ていなかった。何故今になってまた見るようになったのか。いや、今日だけかもしれない。答えの出ない問答をしてしまっ、梅雨半ばの朝。

六月も中旬に差し掛かり、天気予報はすっかり雨だらけになってしまった。学校までそれなりに歩く簞にとっては、雨は好ましくない存在だ。小雨ならまだしも、朝から本降りでは気分も落ちる。傘はお荷物になるくせに雨を完全に防いではくれない。なんて不満を言っても仕方ないので、さっさと用意を済ませて学校に向かう。

「おーっはよ、倉科あ！」

「いってえ！」

一年生の教室、二階へと上がる階段の途中で背中を力一杯叩かれた。じんじんと伝わる痛みをプレゼントしてくれた張本人、かもめが笑顔で横に並ぶ。まだ起きて二時間ほどしか経っていない。計算上一時間に平均一回痛みに襲われることになっている。なんて恐ろしい日だ。

「何でわざわざ叩くんだよ。お前のせいで一時間に一回ペースだよ」
「何それ意味わかんない」

ああ、俺もわかんない。そう言う代わりに深いため息をついた。今日はずいてないな、なんて思っていたがついていた日なんてこの頃あったらどうか。とにかくこの一日無事に乗り切れますように、と普段信じてもない神様に都合良く祈ってみた。

「よお、簞。水橋も早いじゃん。つか一緒かよ」

「緋菜のメールで目覚めちゃって。今日休むんだってさー」
「マジで？ 珍しいな」

教室に入れば出迎えるような形でそこにいたアキラ。雨だろうと晴れだろうと陽気なアキラが何となくうらやましく腹立たしい。頬つぺたを抓ってやろうかと思うくらいに。

かもめが制服のスカートから携帯を取り出し、メール画面を証拠に見せた。そこには淡々と「今日休むからよろしく。二度寝するんじゃないわよ」とだけ書かれていた。嗚呼、なるほど緋菜らしい。篝は一人で納得していたが、このメール、休む理由は書かれていない。言わないだけか、言いたくないのか。

止むことなく降り続く雨、どんよりとした暗い空。無駄に広く感じてしまう右隣に、意味もなく視線を落とす。そこには空気しかない。彼女は今頃、どこで何をしているのだろうか。

六時間の授業のすべてが終了したところ、ふと外に目をやる。あれだけ降っていた雨はすっかり止んで、いつの間にか嘘のように晴れている。無理矢理自転車で学校に来た生徒の歡喜の音が聞こえる。帰ろうとせ、と声をかけてきたアキラに頷く。かもめもその横にいた。

「ね、伊宮って無駄に頭良いよね。何なの？」

「いや何なのってなんだよ」

「絶対こいつ馬鹿だろうって思ってたのになー。この裏切り者」

「褒めてんのか！？ 馬鹿にしてんのか！？」

話の始まりは中間テストの結果だ。誰もがその出来栄えと点数に一喜一憂していたのだが、なんとアキラは知らない間にクラスで三位という秀才のポジションを獲得していた。ちなみに一位は緋菜だ。篝とかもめはというと いや、名誉のために伏せておこう。

校門付近は人がまばらだった。この時間はたいていの生徒は部活中だからだ。しかし偶然にも三人とも部活はしていない。アキラは中学時代の友達とバンドをやっていて、かもめはバイトに力を入れている。篝は単にどれもパツとしないという理由だったのだが、不思議と退屈さなどは感じていない。

その人通りの少ない校門に、こちら側をじっと見つめて立っている人物がいた。

「よっ、かーがり君！ 待ってたぜ」

「……は？」

黒のスウェットにグレーのパーカーを着た、同じ年頃くらいの少年。無造作な茶髪も合わさって少し軽そうに見える。その彼が、ニコニコと笑いながら篝の名前を呼んだ。が、しかし、篝には誰だかわからない。間違いなく、会ったことがない。アキラとかもめもきよんとんと顔を見合わせている。

「なんだよ、中学時代の親友だろ？ 忘れたとは言わせねーぜ。ほら行くぞ。あ、悪いけどこいつ借りてきまーす」

「はっ！？ ちょ、待っ……意味わかんねえ！」

篝の腕をぐいぐいと引つ張り歩いて行く。人違いじゃないのか。そう言おうとしたが、突然の出来事で篝は上手く話せない。アキラとかもめは茫然とそれを見送った。少年の“中学時代の親友”という言葉を信じて。

「いやー、悪いな！　なんか良い言い訳見つかんなくてさ」
「ふざけんなよ！　意味わかんねえし何なんだお前！」

悪びれた様子もなく軽快に笑ってみせる少年に対し、篝は風当たりを強める。少年に手を引かれたまま町を歩く。いったい何処へ連れて行かれるのだろうかとは思ったが、篝は慎重だった。今はまだ、されるがままにしている。前を歩いていた彼が、突如くるりと後ろ、つまりこちらを向いた。

「俺、翔梧ってんだ。緋菜の仲間……って言ったら、わかるよな」

少し声を潜めて、周りの様子をひそかに伺いながらそう言った。彼の言葉の意味を理解した篝はもちろん驚愕した。何故、何の用で。緋菜以外の人間が、一人で自分に会いに来るなんて。真偽はひとまずさておき、正体がわかったところでより警戒を強めた。

「ああ、そんな怖い顔すんなって。ちょっと付き合ってもらいたかっただけだし。じゃ、ゲーセン行こうぜ」
「は、はあ……？」

篝には一向にわけのわからない状況が続いているのだが、お構いなしに翔梧はどんどん歩いていく。心なしか上機嫌だ。こうして篝は初対面の少年と共に遊びに出かけることになってしまった。彼の思惑など読めないままに。

17、放課後の待ち伏せ（後書き）

表側の世界をほとんど書けていないことに気づく。

普通の高校生らしい青春（笑）もそのうち。

ところで、お気に入り登録現在3件。

うち2件が誰かわからずもどかしい、いやはや何とお礼を申し上げれば良いものか……。

逆お気に入りユーザーはわかるのに逆お気に入り小説はわからないんですねー、残念すぎる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3931t/>

ダブルハート～箱庭世界とコイントス～

2011年11月7日13時03分発行